
魔法少女リリカルなのは～世界を守りし者達

辰巳 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜世界を守りし者達

【Nコード】

N2785M

【作者名】

辰巳 翔

【あらすじ】

とある龍騎の世界にいた龍聖と沙世。しかしある日突然神（自称）と紅渡に、「ある世界を救ってほしい」と頼まれた。そのある世界とは、リリカルなのはの世界だった！（原作ブレイクあり、コラボはお気軽に！いろんなライダーも出るかも！）

プロローグ

ここは、とある龍騎の世界・・・この世界には、二人の龍騎がいた・
・

一人目の名は「辰巳シンジ」

二人目の名は「・・・」 「辰巳龍聖」

これからも、ただミラーモンスターを倒しながら生活をするだけだった・・・しかし、この世界での生活は今日で最後になる・・・

龍聖「ああ〜・・・疲れた・・・」

シンジ「ははは今日はいつもより多かったからな。それより、早く帰ったほうがいいんじゃないか？また怒られるぞ、あいつに」

龍聖「やばっ！それじゃあ、シンジ兄さんまた明日！」

そう言っつて龍聖は走っていった。

シンジ「ああ！・・・また明日・・・か。でも、それは無理だな・・・お前らは今日からあの世界を救うために・・・この世界を・・・」

シンジはそこまで言っつて、帰っていった。

・・・龍聖・・・

やばいやばい、早く帰んねえーと！

龍聖「はぁ・・・はぁ・・・疲れる・・・」

あああああ！こついう時にバイクがあつたらいいのに！！てかそれより・・・間に合ええええええ！！

龍聖「やっとだ・・・！」

やっと帰ってこれた・・・

龍聖「ただいまぁぁ・・・」

????「やっと帰ってきたあゝ！遅いよもっ！！」

龍聖「ごめんごめん！いつもより数が多くて苦戦してさ・・・」

????「まぁ・・・確かに・・・耳障りな音がいっぱい聞こえたからね・・・」

龍聖「だったら手伝えよな！沙世！」

こいつは俺の彼女の月風沙世つきかぜのよ。

仮面ライダーファミでもあるな。まぁそれが、帰りが遅いとすぐに怒る悪M「誰のことかな？」・・・

龍聖「・・・何故分かる」

沙世「何となく」

龍聖「ははは・・・」

そして、これからもこんな生活が続くと思ってたのに・・・まさかあんなことになるなんて・・・

- - -夜8時 - - -

龍聖「ふあゝゝ・・・早いけどもう寝るか・・・」

沙世「そうだね」

その時・・・突然灰色のオーロラが現れ

龍聖「な、なんだ!？」

沙世「ちよつと・・・こんな私、聞いてない!」

龍聖「俺も聞いてない!」

二人を包み込んだ・・・それを二人の家の前にいたある人物がみていた。

シンジ「・・・いつちまったな・・・頑張つてこいよ・・・龍聖、沙世・・・」

彼は夜空を見上げ、呟いた。目に涙を浮かべながら・・・。

第1話 『始まり』 (前書き)

作「やっと書けた・・・」

龍騎「更新おそい！」

<ファイナルベント>

作「ぎやあああああ！」

龍聖「さて・・・と、第1話始まるぜ！」

第1話 『始まり』

二人は、ある空間にいた。

龍聖「ここは……」

沙世「龍聖、ここって……」

龍聖「ああ、あのときと同じ場所だ……」

二人は以前この空間に来たことがあるようだ。

？「やあやあお二人さん、いらっしやい」

二人の動きが二・三秒止まった。そして……

龍聖「……なんか聞こえたか？」

沙世「……いや、何にも」

無視することにした………が、二人は次の言葉に驚いた

？「これ！無視するでない！龍騎とファム！」

龍聖・沙世「!？」

龍聖「何故それを！」

？「当たり前じゃ！神なんじゃからな！」

沙世「……………は？神？」

神（自称）「そうじゃ！って、（自称）ってなんじゃ！」

龍聖・沙世「証拠がないから」

神（自称）「酷！」

？「……………そろそろいいですか？」

……沙世……

？「……………そろそろいいですか？」

私と龍聖は、声のしたほうをみた。私と龍聖は声の主を見つけると同時に、その人の名前を大声でさげんだ。

龍聖・沙世「わ、渡さん！？」

渡「お久しぶりです。龍騎、ファム」

私と龍聖をシンジさんの世界に送った張本人でたあああ！

龍聖「え、ええくと……まず、このクソ爺はホントに神なのか？」

あはは、クソ爺だって……あ、落ち込んでる……まあいいか

渡「クソ爺ですか……まあ、それはともかく、一応神です。」

クソ爺「なっ！一応とはなんじゃ！ていうかクソ爺と書くな！」
まさか渡さんがあんなこというとは思わなかった……でも、
凄く正直だな……

そんなこんなで神（自称）を結構いじった後、本題にはいった。

渡「あなた達をここに呼んだのは、ある世界を救ってほしいからで
す。」

龍聖・沙世「ある世界……？」

神（一応）「……そうじゃ」

いや、ある世界ってどいよ

龍聖「ある世界って？」

渡「ある世界とは……」

……リリカルなのはの世界です。」

……はい？

龍聖「リリカルなのはの世界って……」

沙世「あのリリカルなのは？」

渡「はい。そうです」

あ、ちなみに元々私と龍聖は、違う世界の住民だったから、リリカ
ルなのはのことは知ってるよ

沙世「どうする？龍聖」

龍聖「もちろんやるさ。」

渡「そういつてくれると信じていましたよ」

神「いろんな能力もつけるからのお〜」

沙世「魔法とか？」

神・渡「はい」

やった！魔法が使える！

・・・第三者視点・・・

神「じゃあ、まずは龍聖からな」

龍聖「あ・・・ああ」

神「じゃあ、まずはデバイス名からな」

龍聖「デバイスの名前は・・・」「ドラグ」で

神「はいよ。次は魔力じゃ」

龍聖「SSSSで」

神「ふむふむ・・・デバイスの種類は？」

龍聖「ん〜・・・基本はインテリジェントデバイスで。時々違くなるけど・・・」

神「わかった。次は待機時はどうする？」

龍聖「じゃあ、龍形のネックレスで」

神「ほいほい・・・バリアジャケットは？」

龍聖「初バトルのときに想像するからいい」

神「りょーかい。・・・歳は・・・5歳な」

龍聖「オツケー」

神「次は沙世じゃ」

沙世「わかった。デバイス名は「スワン」で、魔力は同じでSSS。デバイスの種類はインテリブーストデバイスで。待機時は・・・羽形のネックレスでいいや。バリアジャケットは、初バトルの時に想像するからいいや。・・・名前も変えて良い？」

神「うむ」

沙世「じゃあ、「フィリア」でお願い」

神「了解じゃ」

渡「それでは、お願いします」

神「頼んだぞ」

龍聖・沙世「ああ！／うん！」

こうして二人はリリカルなのはの世界にいった。

第1話 『始まり』（後書き）

作「うう・・・酷い目にあつた・・・」

沙世を改めフィリア「自言自得でしょ。まったく・・・」

龍聖「それで、これからもちゃんと続くんだろうな？」

作「もちろん！」（分からない・・・）

龍聖・フィリア「正直に」

作「・・・分かりません・・・」

フィリア「正直で結構」

龍聖「でも」

龍聖・フィリア「変身！」

ファム「そして」

龍騎「本日二度目の」

<ファイナルベント> x 2

作「もうやだ・・・ぎゃあああああ！」

フィリア「これからも頑張るので、」

龍聖「暖かい目で見てやってくれ」

龍聖・フィリア「それでは、また次回！」

作：チーン

龍聖「……………」臨終です。」

フィリア「了解」

作「……うおーい……」

主人公設定（無印編）（前書き）

作「シクシクシク・・・」

龍聖「どうした？」

作「シクシク・・・ふえ？」

フィリア「だから、どうしたのかってきいるんだ」

作「ぐすん・・・あのね・・・感想が全然来てないの・・・いくら更新スピードが遅いのを自覚してても、悲しいよ・・・頑張ってるのに・・・」

龍聖「そうかそうか」

フィリア「それは災難だったね・・・」

龍聖「とにかく、今回は主人公設定だ！」（なんかさ・・・フィリアの喋り方が）

主人公設定（無印編）

名前 辰巳 龍聖

年齢 初登場5歳

変身するライダー 龍騎

容姿 ちよつとカツコイイぐらいの顔立ちで、髪は肩より少し長いくらいの茶色に近い黒。背は平均より少し高い。目の色は、うすいエメラルドグリーン。

親は小さいときに亡くなった。最近、海鳴市に引っ越してきた事になっている。（フィリアも同じ）

性格 明るくて優しく、とても人思い。自分より人を優先する。優しいため、人からも好かれる。フラグを立てているのに気づかないという鈍感男。

好きなこと バイオリンなどをひくこと

嫌いなこと・もの 面倒なこと。人を簡単に傷つける奴。

魔力 SSS

デバイス

名前 ドラグ

種類 インテリジェントデバイス

待機時 龍形のネックレス

使用時 ドラゲセイバー

バリアジャケット 少しい赤いマントにグレーのパーカー。白に近いオレンジ色のシャツ、ジーパン。手には右手には、黒のグローブに手首のところにだけに赤いラインが入っているものが装備され、左腕にはドラグバイザー（龍騎に変身したときより少し小さくて、軽い）が装備される。

技は、龍騎のカードを使う。（龍騎サブイブ時のカード・魔法も可）

名前 フィリア（本名 月風 沙世）

年齢 初登場5歳

変身するライダー ファム

容姿 結構かわいい顔立ちで、髪は背中の中あたりの長さで色は少しうすく、あざやかな紅色^{あか}。背は、なのは達より少し高いくらい。目の色は、透き通るような水色

性格 龍聖と同じで、明るくて優しく、とても人思い。優しいため、人からも好かれる。ただし、怒ると男言葉になる。責任感が強い

次元の本棚を利用しようとしているショッカーからねらわれている

好きなこと 龍聖同様、バイオリンなどをひくこと・料理をすること
嫌いなもの 人を傷つける奴

魔力 SSS

デバイス

名前 スワン

種類 インテリブーストデバイス

待機時 羽形のネックレス

使用時 ブランバイザー

バリアジャケット 白いマントに黒のパーカー。白に近い水色のシヤツ、シヨウパン。両手には、白のグローブ（キャロみたいな感じ）が装備され、左腰にはブランバイザーが装備されている。

グローブで魔法を使うときは、白い羽が現れる。

技はファムのカードを使用する。（魔法も可）

レアスキル 元々持っていた「次元の本棚」。次元の本棚とは、あらゆる次元世界のことを知ることができる

龍聖とフィリアは恋人同士

主人公設定（無印編）（後書き）

龍聖「なあ、さよ・・・じゃねーや、フィリア」

フィリア「なんだい？龍聖」

龍聖「いや、作者のこともあるけど、お前・・・フィリップさんみたいな喋り方してるな・・・」

フィリア「まあね・・・それとも、この喋り方は気に入らないかい？」

龍聖「いや、別に・・・それより、こいついつまで泣いてんだ？」

作「シクシク・・・ぐすん・・・ひっく・・・うっ」

フィリア「よほどショックだったんだね」

龍聖「ああ・・・と言つことば」

フィリア「感想、意見、アイデアなど、何でも良いので送って下さい」

龍聖「きつと喜ぶと思つので・・・」

龍聖・フィリア「よろしくお願いします」

作「うう・・・ひっく・・・また次回・・・うえっく・・・」

第2話 『シンジの思い』（前書き）

龍聖「さくしゃく」

作「なぐあにい」

フィリア「もう復活してる・・・」

作「いや、だつてさ、読んでくれている人がいないとき、感想つかかれないじゃん」

龍聖・フィリア「それだけで・・・復活できるものなの？／か？」

作「ん、まあね」

龍聖・フィリア（ある意味すごい！）

作「？ま、いいや、それでは、始まりますー！」

第2話 『シンジの思い』

龍聖「ん？ここは・・・？」

神「お？起きたか」

龍聖「ああ・・・って、ちょっと待て。ここはどこだ？それに、何故貴様がいる！？ちゃんと分かるように説明しろ！いいか、分かるようにだぞ！クソ爺！」

神「分かった・・・！分かったから、首しめるのをやめぬか！話せぬ・・・って力強！苦しい苦しい！もう止めるー！死ぬ死ぬ！ホントに！伝える前に死んじゃうううう！」

フィリア「・・・そろそろ止めたら？龍聖。冗談抜きでホントに死んじゃうから・・・」 苦笑いしつつ

龍聖「ん？・・・あ、ホントだ。すまんすまん、しめすぎた」

と言つてようやく離れた龍聖。てか、あんなに叫んでたのにホントに気づかなかつたのか？

神「はあ・・・はあ・・・苦しかった・・・おぬし、ホントに5歳か？」

龍聖「ん？5歳？・・・ああ、そういえばそうだったな」

フィリア「なんか、新鮮・・・そいえば、説明は？神」

神「ああ、忘れておった。ええと、まずはここはどこかというところリリカルリリカルなのは世界の家じゃ。お主らの

龍聖「マジか・・・」

神「マジじゃ」

ファイリア「あ、無事に着いたんだ。・・・さて、次は何である神神たがいるのかだよ。クソ爺」

神「はうう・・・もうその言い方はやめて・・・凄く傷つくから・・・」

ファイリア「はいはい・・・じゃ、説明して」

神「うむ。何故わしがいるかというのと、ちょっとあることを知らせてなくていけないな」

龍聖・ファイリア「あること?」

神「そうじゃ。この世界は、リリカルなのはショッカーに狙われているんじゃ・・・それで、おぬしらにたのんだんじゃよ。守って欲しいとな」

龍聖「ふん・・・ちょっと待て。」

神「またか。なんじゃ? 龍聖」

龍聖「いや、このことはシンジくんは知ってんのかっておもってな」

すると、神はちよつとくらい顔をした。当たり前前に、龍聖とフィリアは何故か気になった。

フィリア「なんでそんなくらい顔するの？」

神「まずは謝らなければな・・・ごめんなさい」 土下座

この神の行動に二人は固まった。あたりまえだが

龍聖「・・・・・・・・ちよつ！なんで土下座してんの！？お前！」

フィリア「なんか悪いことしたの！？私達に！」

神「それはしたとも・・・無理矢理と言っていていくらいに守って欲しいと頼んだんじゃから」

龍聖「無理矢理？まあ、確かに、いきない灰色のオーロラが来たと思ったらこれだもんな」

フィリア「・・・・・・・・もしかして、私たちにある世界を守って欲しいから、シンジさんに無理に頼んだんじゃ・・・」

神：ぎく！

龍聖「図星かよ！・・・・・・・・それで、シンジ兄さんは、okしたのか・・・・・・・・」

神「そうじゃ・・・・・・・・シンジも決めるのに苦労はしたようじゃ・・・・・・・・」

フィリア「そうなんだ・・・・・・・・じゃ、全部話してくれる？」

神「実はな……」

〈回想〉

シンジ「え？龍聖と沙世と別れて欲しい？」

神「そうじゃ。」

シンジ「なんでだ？突然言われても、意味がわからねえよ」

神「……言いつらいんじやが、あ奴らには、ある世界を守って欲しいんじや」

シンジ「ある世界を守る？」

神「そうじゃ……他の人でも良いかもしれないんじやが……」

シンジ「だったら他の奴にしるよ！」

神「うひょー！」

シンジ「俺は、あいつらのことを「家族」だつて思ってる！そんなあいつらといきなり分かれて欲しいだつて？ふざけるな！あいつらは、俺にとつてすつごく大事な奴らだ！弟と妹みたいな存在なんだ！別れるなんて、無理に決まってる！」

神「じゃ、じゃがな……」

？「では、1日差し上げます。」

シンジ「おまえは？」

渡「僕は、紅渡です。先ほども言ったように、1日差し上げます。それまでの間に決めて下さい。それでは」

シンジ「あ、おい！」

渡「良い返事を、お待ちしていますよ。龍騎」

シンジ「……………あいつらにとっては……………どっちが良いんだ……………」

……………シンジ……………

次の日……………俺は、まだあのことで悩んでいた

シンジ「……………俺は、どうしたら……………」

龍聖「シンジ兄さん！おはようございます！…」

シンジ「ん？……………ああ龍聖と沙世か、おはよう」

沙世「おはようございます、シンジさん。それにしても、元気がないですね。どうかしたんですか？」

シンジ「いや、別に……………」

こいつらとも最後になるかもしれないのか……………

龍聖・沙世「？」

シンジ「なあ、おまえら」

沙世「なんですか？シンジさん」

シンジ「もし、おまえらが世界を守ってくれて言われたら、どうする？」

龍聖「え？それは、俺は守りますよ」

沙世「私もです。シンジさんと別れるのがつらくても、そんなことを頼まれたら……ほおっておけませんよ」

シンジ「そうか……」

こいつら、しっかりしてんなあ……こいつらが「こいつら」って思ってるんなら……

……第三者視点……

約束の日……

渡「決まりましたか？」

シンジ「ああ……」

神「じゃあ、どっちだ？あやつらがいてもいいか、駄目なのか」

シンジ「あいつらには……いってもらおう」

渡・神「!？」

神「ほ、本当によいか!？」

シンジ「ああ……できれば、早く帰りたいから……もういいか?」

渡「はい。ありがとうございます。龍騎」

〈回想終了〉

龍聖「シンジ兄さん……」

フィリア「私たちのことそんな風に思ってくれてたんだ……」

神「本当にすまない……」

留聖「別にいいよ、もうすんだことだし……」

フィリア「そうよ。それに、私たちがいくついていたんだから」

神「そういつてくれるとありがたい……それじゃあ、後は頼んだぞい」

龍聖「ああ!」

フィリア「任せて!」

そして、神はきえていった。

龍聖「さ、まずは魔王さんを探しに行きますか!」

フィリア「そうだね」

二人は未来の魔王（5歳）を探しに行くことにした。

第2話 『シンジの思い』（後書き）

龍聖「終わった終わった」

作「お疲れ〜お二人さん」

フィリア（どこかの放送局からの）

作「ちなみに、ここはただの部屋だよ」

龍聖「だな。さあ〜と、作者」

作「ん〜？なに〜」

龍聖「これからって、いろんなライダーがくるのか？」

作「ネタばれ禁止」

フィリア「ええええええ！」

作「当たり前だ！〜てことで、次回もよろしく！」

第3話 『出会い』（前書き）

作「今回からは！龍聖から、リュウセイとなります！そして、フィリアはリュウセイのことをリュウと呼びます！それでは、これまでのあらすじ！」

（あらすじ）

シンジ「俺は、あいつらのことを「家族」だと思ってる！あいつらは、俺にとってすごく大事な奴らだ！別れるなんて、無理に決まってる！」

渡「では、1日差し上げます。」

シンジ「・・・俺は、どうしたら・・・」

渡「決まりましたか？」

シンジ「あいつらには・・・行ってもらおう」

フィリア「私たちのことそんな風に思ってくれてたんだ・・・」

リュウセイ「さ、まずは魔王さんを探しに行きますか！」

フィリア「そうだね」

あらすじ終了）

作「それでは、始まります！」

第3話 『出会い』

……リュウセイ……

俺とフィリアは、とにかく公園にむかってまあくす。あ、場所はフィリアの持つてる次元の本棚で検索し

たんだ。もしかしたらちようど士郎さんが怪我をしてる頃かもしれないということ、一人で寂しい思い

してるかもしれないということだね。

フィリア「……………あ、リュウ！いたよ！」

リュウセイ「ん？……………ホントだ……………って、「リュウ？」

フィリア「よし、レッツシグー！」

リュウセイ「（無視！）」

なのは「ぐすん……………」

フィリア「ねえ、君どうしたの？」

なのは「ふにゃ？」

うわ……………涙目超かわいい……………はっ！（後でお話ねリュウ）……………やばい（大汗）

……フィリア……

たく、リュウつたら・・・

なのは「お姉さん達は？」

って、年上に見え・・・るのも無理ないか

フィリア「お姉さんって・・・私たち同い年よ。私はフィリア。最近この町に来たの。これからよろしくね」

なのは「ふえ！？同い年だったの!？」

リュウセイ「そうだ。俺は辰巳リュウセイ。よろしくな」

なのは「私は高町なのは。よろしくね、フィリアちゃん、リュウセイ君」

フィリア「何で泣いてたの？なのはは」

なのは「あのね・・・」

まあ、なんでかは知ってるけどね・・・とにかくなのはが話しているのを聞く

・・・第三者視点・・・

説明中・・・

なのは「っていうことなの」

フィリア「あ、泣かないで！」

リュウセイ「一人で寂しかったんだな」 頭撫でつつ

なのは「／／／うん／／／」

ドラグ【（・・・フラグ・・・）】

リュウセイ「（うお！びっくりすんなあ・・・てか、いきなり話しかけるな！）」

ドラグ【（すいません）】

スワン【（マスター、リュウセイさんは・・・鈍感ですか？）】

フィリア「（うん・・・）」 「じゃあ、私たちと遊ぼうよ！」

リュウセイ「そうだな！もう友達なんだからな！」

すると、なのはの表情が明るくなり、

なのは「うん！」

と元気よく返事をした。

・・・フィリア・・・

それから私となのは、リュウは毎日のように遊んだ。お見舞いにも
いったりした。そんなある日・・・

なのは「あのね、お父さんと、お母さんがもう一度会いたって
ってたの。だから明日、私の家に来て欲しいの。」

フィリア「なのはの家？」

まあ、ほんとには知ってるけどね

なのは「えっと……「翠屋」って言えば分かるかな？」

リュウセイ「分かった。じゃあ、明日行くからな」

なのは「うん！まってるね！」

ああ……なんかリュウがシスコンと勝負しそう……

第3話 『出会い』（後書き）

フィリア「いやぁ・・・なのはってアニメで見るよりかわいかったなあ」

リュウセイ「俺はフィリアがいちばんだけどな」

フィリア「／／／／／」

作「（バカツプル・・・）」

リュウセイ「聞こえてるぞ。お前だって恋人いるくせに・・・」

作「な！／／／」

フィリア「今度なんかねえd」禁止禁止！それ以上はあああ！謝るからああ！」はいはい」

リュウセイ「どんだけいやなんだよ」

作「当たり前だろ！？／／／」

リュウセイ「顔紅いぞお〜！」

作「~~~~／／／／／」

フィリア「ふふ、それでは、また次回」

第4話『リュウセイVSシスコン！そして龍騎・ファムVSミラーモンスター』

……第三者……

次の日……リュウセイとフィリアの家……

リュウセイ「ふああ……よく寝た……」

フィリア「あ、起きた？朝ご飯出来てるよお冷めないうちにどうぞ
お〜」

リュウセイ「わかったあ」

フィリア「ふふ、リュウツたらかわいい」

リュウセイ「な！？／／お、お前が言うなよ！自分もかわいいいくせ
に！」

フィリア「／／／にやにを言ってるの！リュウ！／／／」

リュウセイ「ちゃんと覚えてないぞお〜！」

フィリア「むっうう！」

神「……朝からアツアツですな……お二人さん」

リュウセイ「うお！神いつのまに!?!」

神「最初の方からいたが……もしかして、気づかなかった？」

リュウ・フィリ「うん」

神「わし悲しい・・・」泣きながら

フィリア「あ、今日はなのはの家に行かなきゃ！」

リュウセイ「そうだったな。じゃあ早くご飯食べよ」

フィリア「だね」

二人は朝ご飯を食べて翠屋に行くことにした。神は泣いてたとか（笑）

・・・リュウセイ・・・

ただいま俺達はなのはんちに向かってます。場所はフィリアの元の本棚でやったから、俺はフィリアについて行ってる感じかな？

フィリア「リュウ、もうちょっとだよ」

リュウセイ「ん、分かった」

いあやあ・・・早いなあ・・・てか、こんなに近かったのか？神よ

神 そのとおり！

リュウセイ（うお！いきなり声出すなよ！てかいつから！）

神（すまんすまん、驚かす気はなかったんじゃが・・・）

リュウセイ（そんなこと思ってたらフルボッコだ！）

フィリア「リュウ、着いたよ！魔お・・・じゃなくて、なのは家に」

リュウセイ（言いそうになったな、今）「分かった・・・って、間近で見るとすっごく立派だな・・・」

フィリア「だね・・・とりあえず、入ろうか」

リュウセイ「そうだな」

ああ、なんかシスコンが勝負仕掛けてきそう・・・

・・・フィリア・・・

フィリア「こんにちはあ・・・」

美由希「いらっしやいませ」

リュウセイ「始めまして。なのはの友達の辰巳リュウセイです」

フィリア「同じくなのはの友達のフィリアです」

美由希「あ、あなた達がなのはの言ってた友達ね。今よんでくるね」

そういつて美由希さんは奥の方に入っていった。

フィリア「（ねえ、リュウ）」

リュウセイ「ん？なんだ？」

フィリア「（シスコンが勝負仕掛けて来ると思う？）」

リュウセイ「（ああ・・・思う）」

フィリア「（やっぱり・・・）」

なのは「リュウセイ君！フィリアちゃん！」

フィリア「ちゃんと来たよ。なのは」

なのは「うん！ありがとう！」

シスコン「ん？君達は？」

なのは「あ、お兄ちゃんなのはが話した友達だよ！」

はいはい来たよ。シスコンさんがねえ・・・

シスコン「ふうん・・・てかシスコンって書くな！」

フィリア「ところで、士郎さんは？」

なのは「道場に居るよ」

リュウセイ「じゃあ、連れて行ってくれ」

なのは「りょくかあ〜い！」

かわいい・・・アニメで見るよりやっぱりかわいい・・・それにしてもリュウセイ、がんば

・・・第三者・・・

（道場）

二人は士郎さんと少し話した後、帰ることにした・・・・・・・・・・が、やはり、恭也に止められた。

恭也「行くぞ。リュウセイ」

その時

キイイイイイイン！

リュウ・フィリ「！！」（ミラーモンスター！）

フィリア（こんな時に・・・）

リュウセイ「恭也さん、また今度じゃ駄目ですか？」

恭也「駄目だ」

リュウセイ「どうしてもですか？」

恭也「そうだ・・・それとも、俺に勝つ自信がないのか？」

リュウセイ「・・・・・・・・・・受けて立ちましょう」

フィリア「(ちょっと！リュウ！ミラーモンスターは！？)」

リュウセイ「(頼む。こっちが終わり次第すぐに行く！)」

フィリア「(・・・分かった。じゃ、行ってくる)」

リュウセイ「(ああ)」

フィリア「なのは、ちょっと家に忘れ物したからとってくるね」

なのは「え？だったら私も行くよ」

フィリア「なのはは、どっちが勝つかみてて」

なのは「・・・うん！分かった！」

フィリア「(急がないと！)」

フィリアは走って人目の着かない所に来た。そして、

フィリア「変身！」

・・・フィリア・・・

フィリア「変身！」

私は、ファムに変身した

ファム「そんじゃ、行きますか！」

そして私は鏡に飛び込んだ。そしてミラーワールド・・・って、

ファム「多いし！・・・まあ、大丈夫か・・・な？」

なんか不安・・・でも、リュウが来てくれるから大丈夫か！

・・・リュウセイ・・・

ああ・・・フィリアに悪い事したな・・・後で謝んなきゃな

恭也「もういいか？」

リュウセイ「あ、はい。俺は素手でやります。」

恭也「ではいくぞ！」

リュウセイ「いつでも！」

早く終わらせて、早くフィリアの所に！

恭也「はあああ！」

つと、恭也さんが俺に向かって走ってきた。ま、簡単に避けられるけどな

リュウセイ「よつと」

恭也「なに！？」

リュウセイ「はあああああ！」

俺は恭也さんに思いつき蹴りを入れた

恭也「うー!？」

リュウセイ「あ．．．やりすぎた．．．」

あ、早く行かないと!

リュウセイ「なのは、俺フィリア迎えに行ってくる!」

なのは「あ、ちょっと!リュウセイ君!」

リュウセイ「ここなら大丈夫か．．．変身!」

俺は龍騎に変身した

龍騎「しゃ、いくか!」

俺はミラーワールドに来た．．．って、あいつは?

ファム「リュウ!もう終わったの!？」

龍騎「あ、うん」

ファム「早いなあ．．．ま、とにかくやるぞ!」

龍騎「ああ!いつきにあれを!」

ファム「うん!」

<ファイナルイベント> x 2

龍騎・ファム「はああああああ！」

ミラーモンスター達「ぐわああああああああ！」

ファム「ふう……」

俺達は現実世界に戻って変身を解除した。その瞬間、フィリアが俺の方に倒れてきた

リュウセイ「おい！フィリア!？」

フィリア「ゴメン、リュウ」

リュウセイ「ごめんは俺の方だ。無理させて……歩けるか？」

フィリア「何とか……ってうわあー！」

リュウセイ「おっと!……たく、無理すんなって……よつと」

フィリア「／／／ちよつと!リュウ!?なにしてんの!?!／／／」

リュウセイ「／／／なにつて、……お姫様抱っただけど?／／／」

ああ……超はずい……／／／／／

フィリア「なな、なんで?／／」

リュウセイ「だって、歩けないだろ?疲れて」

フィリア「うっ！・・・」

リュウセイ「分かったら大人しくされてろ／＼」

フィリア「う、うん／＼」

俺とフィリアはあの状態のまま翠屋に向かったため、なのはからはどす黒いオーラがでてるは士郎さん達にはからかわれるわですっごく大変だった・

第4話『リュウセイVSシスコン！そして龍騎・ファムVSミラーモンスター』

作「おつかれえ〜」

リュウセイ「ああ・・・」

フィリア「てかいきなりミラーモンスター出てきたね・・・」

作「だって！ミラーライダーズだったら当たり前前ミラーモンスター！」

リュウセイ「はいはい」

フィリア「今回は言いたいことがあるんじゃないの？」

作「あ、そうだったそうだった・・・ええ〜、感想、意見、駄目だし、アイデアなどの他に、ものをこっちの誰かに送りたい！などのお土産なども大歓迎です！」

フィリア「だそうです」

作・リュウ・フィリ「それでは、また次回！」

第5話『VSワーム』（前書き）

作「ええ、読んでくれている読者の皆様、申し訳ありません！四日も更新しないで！反省しています！」

リュウセイ「読者の皆様、許してやって下さい」

フィリア「お願いします」

なのは「……………第5話、始まります」

第5話『VSワーム』

……リュウセイ……

ああ、今は酷い目にあってます……魔お……なのはが5歳にしてありえない殺気はなつし、土郎さんに桃子さんには、すっごくからかわれてる……

リュウセイ「（ああ）フィリア、助けてくれ……」

フィリア「（なんでえ？別に良いじゃん）」

リュウセイ「（……嫌いになるぞ）（やだ！それはやだ！）
……はや。じゃあ、助けてくれよな）」

フィリア「（りょかい）」

リュウセイ「あの……」

なのは「何かな？リュウセイ君」 目が笑っていない笑顔。どす黒いオーラをだしながら

やっぱだめ……フィリアあ

フィリア「私たちもう帰らないといけないんです」

桃子「あら？お母さん達が待ってるのかしら？」

あ……駄目だ駄目だ、もうこれに関しては泣かないって決め
たんだ

フィリア「……いえ、親はいません」

実際、俺達本世の世界の世界は滅びて、シンジ兄さんの世界にいったから、俺達の親は本当に居ないんだよなあ……ま、この話は番外編かな？

桃子「！ごめんなさいね……」

フィリア「気にしないで下さい。もう、慣れてるので……」

なのは「じゃあ、朝ご飯とかは？」

リュウセイ「ああ、それはフィリアが作ってくれるから大丈夫だ。こいつ料理うまいからな」

フィリア「そうかな？／＼／」

ん？顔紅くしたぞ？どうしたんだ？

フィリア「と、とにかく、もう帰るのでリュウセイを返して下さい」

俺は物か俺は。扱い酷いぞ、フィリア

桃子「あらあく残念。でも仕方がないわよねえくそれじゃあ、なんか困ったときは来ると良いわ」

フィリア「はい。ありがとうございます。桃子さん」

桃子「気お付けてね」

リュウ・フィリ「はい」

なのは「フィリアちゃん、今度料理食べさせてね!」

フィリア「うん!じゃあ、またね!」

仲良いなあ、こいつら・・・

・・・第三者・・・

リュウセイとフィリアは、翠屋を出た後、家に帰っていたのだが・・・
・帰る途中にある怪物と出会った。

リュウセイ「こいつって、なんだ?」

フィリア「・・・いま検索した結果、「カブトの世界」の敵、「ワーム」とか言う奴らしい。しかも脱皮をすると、「クロツクアップ」って奴を使うらしいよ」

リュウセイ「クロツクアップ・・・?」

フィリア「簡単に言えば・・・高速移動・・・かな?」

リュウセイ「うっわ、やっかいだな・・・ま、魔法使えば何とかなるだろ」

フィリア（うわ、テキトー・・・そうかもしれないけど）

リュウセイ「ま、とにかく」

リュウ・フィリ「セットアップ!」

なお、バリアジャケットは、主人公設定を見て下さい。申し訳ありません

リュウセイ「やるか、魔導師での初バトル」

フィリア「だね」

リュウセイ「てか、二体居たのか・・・一体影薄い」

ドラグ【マスター、さすがにそれは可哀想です・・・】

リュウセイ「ま、気にしない 行くぞ！ドラグ！」

ドラグ【イエス、マスター】

フィリア「なるほど、二手に分かれるのね・・・よし、行ける？スワン」

スワン【いつでもokです。マスター】

フィリア「うん、たのもしい。それじゃ、行くよ！スワン！」

スワン【了解、マスター】

二人はワームにかけて、走っていった

・・・リュウセイ・・・

<ソードベント>

リュウセイ「はあああ！」

ワーム「ぐわあ！・・・貴様、カブトじゃないな！？」

リュウセイ「だったらなんだ！」

<ストライクベント>

リュウセイ「りやあああああ！！」

ワーム「くっ！だったら」

ん？なんだ？・・・て、これがフィリアの言ってた脱皮ってやつか・
・・・って、きもいし！

ワーム「覚悟しろ！」

なっ！消えた！？

リュウセイ「どこだ！・・・ぐわあああ！」

いって〜・・・ふざけやがって！

リュウセイ「だったら！魔法で同じようなやつがあるぜ！・・・

・・・ソニック・マッハ！」

ワーム「何！？ついてこれているだ！？なぜだ！」

リュウセイ「魔法だからだ！はああああ！」

ワーム「がああああ！」

リュウセイ「最後だ！」

<ファイナルベント>

リュウセイ「はああああ．．．たあああああ！」

ワーム「ぐわあああああ！」

ふう．．．終わった終わった

リュウセイ「あとは、フィリアだな」

．．．フィリア．．．

ああ．．．早く終わらせよ

フィリア「ウイングシュート！」

ワーム「ぐわ！くそ、こいつっ！調子にのんな！」

フィリア「ああ？調子になんかのってないわよ！あんたが弱いだけでしょ？」

ワーム「なっ！？こいつ、言わせておけばいろんな事を．．．も
うゆるさん！」

フィリア「あんたに悪い事した覚えはないんですけど？」

うわ．．．脱皮した．．．気持ち悪．．．

ワーム「お前はついてこれるかな!？」

フィリア「?・・・うわああああ!」

くっ!クロックアップ・・・!油断した

フィリア「あんたこそ、調子にのってんじゃ・・・ねええええ!ソニック・スピード!」

ワーム「なっ!ついてくるだど!?バカな!」

スワン【ソニック・スピードは、高速移動するためにある物です。ですから、クロックアップとやらにも対抗できます】

リュウセイのソニック・マッハも同じです。

ワーム「くっそおおおおお!」

フィリア「終わりだああ!」

<ファイナルベント>

フィリア「はああああ!」

ワーム「バカな・・・バカなあああ!ぐわあああああ!」

終わった・・・リュウセイも終わったらしいね。さて、帰りますか

・・・第三者・・・

リュウセイ「フィリア、大丈夫か?」

フィリア「え？うん、大丈夫」

リュウセイ「そうか？なんか元気ないぞ？」

フィリア「ちょっと疲れただけ」

リュウセイ「まあ、無理すんなよ？」 頭を撫でながら

フィリア「／／／う、うん／／／」

リュウセイ「？顔紅いぞ？」

フィリア「そ、そつかな？／／／」（誰のせいだ！）

リュウセイ「てか、今何時だ？ケイタイケイタイ……………」

リュウセイは、ケイタイで時間をみて、驚き言葉がでなかった……

フィリア「リュウ？どうしたの？」

リュウセイ「ん？ああ……もう8時だ」

フィリア「……………ごめん、ワンモア」

リュウセイ「もう8時だ」

フィリア「えええええええ！？」

そう、辺りはもう暗いのだ。ワームとの戦いが結構長引いてしまっ

ただ。

リュウセイ「……………はやく帰ろっか」

フィリア「だね……………」

二人は急いで家に帰ったとか（笑）

第5話『VSワーム』（後書き）

作「本当に申し訳ありません、スイマセンスイマセンスイマセンスイマセンスイマセン……」

リュウセイ「うわ……凄い謝ってる……」

フィリア「それだけ申し訳ないって思ってるんだよ……」

リュウセイ「だな……」

フィリア「気持ち切り替えてっど……次回は私たちが小学一年になる話までとぶよ！」

リュウセイ「俺たちにとっちゃ二回目だけだな……」

フィリア「はは……」

リュウセイ「俺たちは最初、学校には行ってないが神がいけっとうから行くことにしたんだ」

フィリア「もちろん、なのはと同じだよ」

リュウ・フィリ「次回もお楽しみに〜！」

作「スイマセンスイマセンスイマセンスイマセンスイマセン……」

第6話『翠屋に行こう！神からの知らせ』(前書き)

作「ふう〜・・・何とか更新できた・・・」

リュウセイ「お疲れさん」

フィリア「はあ・・・このごろ暑いよねえ〜・・・」

作「まったくです・・・」

リュウセイ「まあ、とにかく」

作・リュウ・フィリ「第6話、始まります!」

第6話『翠屋に行こう！神からの知らせ』

……リュウセイ……

あれから時間がたち、なのははちょうど一年生になったころかな？
ま、俺らは怪人がいつ出るか分からないから学校にはいかないけどな

リュウセイ「ああ……暇だ」

フィリア「だよね、なのはは学校だし」

神「そんなことを言っただけか、今は今だけかもしれんぞお！」

リュウセイ「どわああああ！」

フィリア「い、いきなり出てこないでよね……」

神「ああ、すまんすまん」

リュウセイ「で、さっきのはどついう意味だ？」

神「ん？ああ、あれのことか。実はな、お主らには明日から

……学校に行ってもらおう！」

……はい？

フィリア「え？何で？いつ怪人が出てくるか分からないの？」

神「いや、渡と話し合った結果がこれじゃ。仕方がないじゃろ。渡が行かせるようになっていっとなんじゃから」

渡さくん・・・何で急に・・・

リュウセイ「なんで急に・・・」

神「まあ、とにかく制服はおいていくから、明日から行くように。学校はなのと同じ所じゃ。あと、お金は家の金庫にいれといたからなあ。そんじゃ、忙しいから帰るわ。ほんじゃねえ」

リュウセイ「あ！ちよつとまって！・・・たく」

フィリア「マイペースな奴だな・・・」

あ、少し怒ってる。神よ、フィリアを怒らせるな。怖いんだから。きれるとき

・・・第三者・・・

フィリア「ねえ、学校の手続きはさ、やっといってくれたのかな？」

リュウセイ「やってんじゃねーの？じゃなかったら言わないだろ」

フィリア「だね。それでさ、これからどうする？」

リュウセイ「ん・・・翠屋に行くか？」

フィリア「何で？」

つて、授業中に怪人出てきたらどうすんの？それを考えると・・・
・はあ〜

フィリア「はあ〜・・・」

リュウセイ「どうした？フィリア。溜息なんかついて」

フィリア「え？いや、別に・・・」

リュウセイ「なんかあつたら言えよ」

フィリア「うん！」

やっぱり、リュウは優しいなあ・・・そういえば、あいつ元気にし
てるかなあ〜。あいつもクールで優しかったんだよなあ〜

そのころ、別世界・・・

あいつ「クシユン！・・・風邪引いたか？」

はあ・・・何で最近怪人でないんだろう・・・

リュウセイ「お・・・フィリ・・・」

でも、できてても困るか

リュウセイ「おい、・・・ア・・・」

でも、はやく私を捕まえたのなら、早く来れば良いのになあ・・・

リュウセイ「おい！フィリア！」

フィリア「ふえあ!?!にゃに!?!」

リュウセイ「どうしたんだ?さっきからボーっとして。熱でもあんなのか?」

そういつてリュウは顔を近づけて・・・て、

フィリア「え?」

／／／／／／／／／／!!!

フィリア「／／え!?!ちよつとリュウ!?!／／／」

え?今の状況?んつとね簡単に言えば・・・うちとリュウのおでこがくっついてます／／ひじょくには、はずい状態です／／／

リュウセイ「熱はないな・・・／／／」

あ、リュウも顔が紅い・・・やっぱりはずかったんだ

フィリア「／／／／／と、とにかくいこ!」

リュウセイ「／／／あ、ああ・・・／／／」

・・・第三者・・・

なんやかんやで翠屋・・・

リュウセイ「こんにちはあゝ」

美由希「いらっしゃいませ〜・・・ってあれ？リュウセイ君とフィリアちゃんじゃん」

フィリア「こんにちは。美由希さん」

美由希「今日はケーキ食べに来たの？」

リュウ・フィリ「はい」

美由希「じゃあ、ついてきてね〜」

そして二人はケーキを食べて帰ろうとしたが、桃子に止められた。

桃子「ちょっとまって、二人とも」

リュウセイ「なんですか？桃子さん」

桃子「二人は学校には行かないの？」

フィリア「えっと、明日から行きます。あ、手続きは親戚神と渡さんがしてくれました」

桃子「そうなの。それで、学校は何処の学校なのかしら？」

リュウセイ「なのはと同じ所です。」

桃子「あら、そうなの」

フィリア「あ、でもものには言わないで下さい。ドッキリみたいにしたいで」

桃子「ふふ、分かったわ。それじゃあ、また来てね。二人とも」

リュウ・フィリ「はい」

こうして二人は家に帰った

第6話『翠屋に行こう！神からの知らせ』（後書き）

作「ふあゝ・・・眠い・・・」

リュウセイ「当たり前だろ。もう11時すぎてんだから」

フィリア「後は私とリュウがやるから寝て良いよ」

作「んじゃ、お言葉に甘えます・・・」

リュウ・フィリ「おやすみ〜」

リュウセイ「さて、なんか作者が短編書くらしいな」

フィリア「なんで私とリュウがシンジさんの世界に行ったか書くんだって」

リュウセイ「そしてフィリアが言ってたあいつの正体が明らかになるぜ！」

フィリア「私にとって、あの出来事は・・・消したいのに消せない記憶・・・」

リュウセイ「俺もだ・・・次回もお楽しみに！」

作「・・・ZZZ」

第7話『小学校へ！フィリアを泣かせる奴はゆるさねえ！』（前書き）

作「書き終わったぜ！！」

リュウセイ「はいはい、ご苦労様」

レン「夜なんだから静かにしろよ」

作「すみません……」

フィリア「ふああ……眠い……」

リュウセイ「……おい、この状態、どうすればいい？／／／／」

ちなみに、今のリュウセイの言ってる状態とは、フィリアがリュウセイの方に倒れてきて、リュウセイの肩にフィリアの頭がのってるかんじ？

レン「……」（おもろい……あんなリュウセイ始めて見た……）

セナ（あんなリュウ君、始めて見た……）

作「それでは、何だかんだで第7話」

リュウ・レン・セナ・作「始まります！！」

フィリア「くう……くう……」

リュウセイ（／／か、かわいい・・・／／）

第7話『小学校へ！フィリアを泣かせる奴はゆるさねえ！』

……リュウセイ……

次の日

リュウセイ「ふあああ……今何時だ？……ってあれ？」

起きあがれん……それに腕に違和感が……って！

リュウセイ「なにしとんじゃあああ！」

俺はおもいつきり起きあがった

フィリア「ん……？にあに？リュウ……朝から騒がしい……」

フィリアが目をこすりながら起きあがった

リュウセイ「誰のせいだ誰の！」

フィリア「だあれ？」

あ、やっべ……可愛い……ってそうじゃなくて！

リュウセイ「いや、あきらかにお前のせいだろ！」

フィリア「ええ……うっそお……」

え？何でこいつのせいかって？だって朝起きたら隣にいたし。おまけに腕に抱きついてた……もうびっくりしたよ。ホントに

リュウセイ「良いからまず起きろ！今日は学校に行くんだぞ！」

フィリア「ああ〜・・・そうだった・・・ご飯の準備・・・の
前に着替えに着替え」

リュウセイ「おい、ちょっと待て。俺がいるんだぞ？」

フィリア「ん？・・・ああ、別に付き合ってたんじゃないにゃん・
・・・」

フィリアはそういって脱ぎ始めた・・・って！

リュウセイ「おいこら！恋人とか関係ねえだろ！これは！」

俺は急いで布団に潜った。ていうか言えてないぞ？ちゃんと

リュウセイ（はあ・・・こいつは寝ぼけてるところなんだから・・・
）

フィリア「もう終わったから大丈夫だよ〜・・・ふあ・・・」

もとに戻った。これなら安心だな

リュウセイ「分かった」

フィリア「じゃあ、準備してくるね」

リュウセイ「ああ、頼む。いつもごめんな」

フィリア「気にしないで、私が好きでやってるんだから」

リュウセイ「そういつてくるとありがたい」

フィリア「そんじゃ、早く着替えて来てね」

リュウセイ「りょくかい」

俺はフィリアが出て行ったのを確認し、着替え始めた

・・・フィリア・・・

さて、早速やりますか！

フィリア「今は何時だ・・・？7時か・・・ま、大丈夫でしょ」

あ、お弁当もか。忘れるとこだった・・・遅くなったら神に頼んでオーロラで連れて行ってもらうか

リュウセイ「おまたせえ・・・」

フィリア「あ、ちょうど良いところに。お弁当何が良い？」

リュウセイ「あ、弁当もか・・・」

あ、同じリアクションだ

リュウセイ「どっちもは大変だろ。弁当は俺がやる」

え・・・？ちなみに、リュウも料理は私くらいうまいから

フィリア「いいの？」

リュウセイ「ああ。いつもしてもらってたから、これぐらいしねえとな」

ふふ、やっぱり昔と変わらないや

フィリア「ありがと リュウ」 満面の笑み

リュウセイ「別にたいしたことじゃねえだろ／＼」

を、顔紅い・・・面白い・・・え？料理してるかって？しながらやってるよ。ちゃんと

リュウセイ「・・・あいつら、助かったかな・・・」

フィリア「あいつらって・・・」

リュウセイ「レンとセナだ。あれからレンのこと、全然みてねえし・・・」

フィリア「うん・・・」

レン、セナ・・・無事なの？レン、ちゃんと約束、守ってよね

リュウセイ「・・・なんか、ごめんな。朝からこんな話して」

フィリア「え？あ、全然平気だから・・・」

ホントは、辛いけど・・・今は、こんな事気にしてちゃ駄目だから・

・・・だって、渡さんに頼んだから。レンと・・・レンとセナを
たすけてって・・・

・・・第三者・・・

そのころ、神と渡・・・

渡「神、あの二人は、あの世界ですか？」

神「うむ。あいつらにも、リュウセイとフィリアがいた世界から渡
が助け出したあと、リュウセイとフィリアと同じ世界に行ってもら
ったからな」

渡「そうですか。それでは、ここに呼んで下さい」

神「あやつらにも、行ってもらおうんじやな？」

渡「はい、直接僕達が言うより、本人達にあの二人にあって、無事
だと言っことを知らせてもらおうのが一番です」

神「じゃな。そんじや、呼びますか」

渡「お願いします」

神「よし、何処にいる？レンとセナよ」

場所は戻ってリュウセイとフィリアの家

リュウセイ「準備OKか？」

フィリア「うん」

リュウセイ「よし、んじゃ呼ぶか。おゝい、神〜」

神と渡は・・・

リュウセイ『おゝい、神〜』

神「こんな時にか」

レン「あれは・・・！」

セナ「リュウ君にサヨちゃん!？」

レン「どういう事だ!？」

渡「さつきいったでしょう? 貴方達に行ってもらう世界には、知り合いがいると」

セナ「まさかリュウ君とサヨちゃんだなんて・・・」

神「いったんいつてくるわ」

渡「はい。お願いします」

レン「俺たちも行くんだろ? あの世界に」

渡「はい。もう決心はしましたね?」

レン・セナ「ああ/はい」

渡「それでは、これから色々とあります・・・」

リュウセイとフィリアは・・・

神「なんじゃ？今忙しかったのに・・・」

リュウセイ「ゴメンゴメン。ただ、学校に連れていってくれっかな
つてさ」

神「それだけか・・・」

フィリア「うん、まあね・・・そんじゃ、時間ないからよろしく」

神「はいはい・・・」

こうして二人は学校に行ったとさ

・・・リュウセイ・・・

そして学校・・・

ザワザワとしているクラスに、先生が入っていった

先生「はいはい、静かにして下さい。昨日突然決まったのですが、
転校生を二人紹介します」

クラス中から「男の子かな？女の子かな？」や「男の子がいいな」
とか「女の子がいいな」など色々と聞こえる。廊下まで聞こえるぞ。
どんだけ声でかいんだよ

先生「し・ず・か・に！それでは、入ってきて、自己紹介をして下さい」

先生、あんたも声でかいよ・・・まあ、おれとフィリアは教室にはいった

リュウセイ「辰巳リュウセイです。よろしく」

フィリア「フィリアです。よろしくお願いします」

なのは（リュウセイ君とフィリアちゃん！？）

先生「二人の席は、なのはさんの後ろの席ね」

リュウ・フィリ「はい」

何だかんだで休み時間・・・おきまりの質問攻めタイム

男子A「フィリアちゃんはどこから来たの？」

男子B「外国から来たの？」

男子C「リュウセイとはどういう関係？」

フィリア「・・・」

あ・・・やばいかも・・・

男子D「どうしたの？」

男子A「具合悪いの？」

男子B「大丈夫？」

フィリア「あのさ、いつきに質問されても、答えられないでしょ？そこはきおつけてね。あと、リュウのこと呼び捨てって生意気」

フィリア「……笑ってると思うけど、目は笑ってないよ……」

男子A・B・C・D「はい」

んでもって、俺は……」

女子A「ねえねえ、リュウセイ君はどこから来たの？」

女子B「フィリアとどういう関係なの？」

フィリアを呼び捨てとは生意気な……」

女子C「あのこのさ、親って外国人なの？」

女子D「リュウセイ君は分かるよね？」

あ……フィリアがちょっと泣きそう……フィリアを泣かせる奴は……」

リュウセイ「いい加減にしろよ。お前ら……」

女子C・D「？」

誰であるつと・・・

リュウセイ「人の気持ちも知らないで・・・!!」

ゆるさねえ!

なのは「リュウセイ君、怖い・・・」

アリサ「ホントよね・・・」

すずか「あんなに怖いんだね、怒ると・・・」

・・・フィリア・・・

何だかんだでやつとお昼・・・はあ・・・

フィリア「まさか、あんなこと言われるとは思はなかった・・・」

リュウセイ「だな・・・でも、お前のことは俺が守るからな」

フィリア「うん」

やっぱり、リュウは頼りになるなあ・・・

なのは「ねえ二人とも、一緒にお弁当食べよ？」 黒いオーラを少し出しつつ

フィリア「いいよ」

はは、怒ってるねえええ・・・完璧に・・・

そして屋上・・・

なのは「リュウセイ君とフィリアちゃんさ、怖かったよ」

アリサ「そうそう」

すずか「怒りたいのは分かるけど、あれは凄く怖かったよ・・・1年生にしては」

リュウセイ「そうか？」

フィリア「あれが本気ではないよ」

リュウセイ「（未来の魔王が俺たちの事恐れてたな・・・）」

フィリア「（だね・・・ってか、言っちゃいけないこと言ってるって）」

リュウセイ「（あ・・・）」

フィリア「（まあ・・・ドンマイ？）（）」

あ、ちなみに今のは分かっているとと思うけど、念話だよ。それより、リュウセイ。なのはバカから絶対一つは何か飛んでくるって

・・・第三者・・・

いろんな事があつたが帰り・・・

リュウセイ「ふあ・・・眠い」

フィリア「はは」（あのとときと変わらないな・・・リュウは）

なのは「ねえねえ、二人の家ってさ、どこにあるの？」

フィリア「えとく・・・なのはの家の近くだとは思っよ」

なのは「明日遊びに行っても良い？」

リュウセイ「俺は良いぞ」

フィリア「私も」

なのは「じゃあ、明日遊びに行くね！楽しみにしてるから！また明日ね！」

リュウ・フィリ「じゃあねえ」

リュウセイ「さて、帰るか」

フィリア「だね」

二人は家に帰った。こうして二人の第二回目の小学校生活の1日目は幕をとじたとき

第7話『小学校へ！フィリアを泣かせる奴はゆるさねえ！』（後書き）

作「ああ・・・疲れた疲れた、眠い眠い」

リュウセイ「じゃあ寝ろ」

作「了解。そんじゃおやすみ。・・・zzz」

レン「寝るの早！」

セナ「うん、確かに」

レン「今回は、俺たちがリリなのの世界に行くために必要なこと、デバイスの名前とか、設定についてだ」

セナ「なのはバカって言い方は失礼だけど、レンはなのはとは付き合いません。付き合ったらフルボッコです」

レン「大丈夫だって、俺はセナが好きなんだから」

セナ「私もレン君のこと好きだよ」

作（入ってはいけない感じがする・・・）「それでは、また次回！」

第8話『Fの思い／仲間は仲間』（前書き）

カチカチ

作「で、小説を読もうつと・・・」

カチヤカチヤカチヤ

作「んでもって、辰巳 翔って検索つと」

カチヤカチヤ・・・カチ

作「・・・感想は、きてないつと」

リュウセイ「なにしてんだ？ あいつ。毎日してるよな？」

フィリア「滅びた世界、そして失ったもの・・・」に、感想来て
ないかチエックしてるらしいよ」

リュウセイ「ふうん・・・ま、とにかく第8話『Fの思い／仲間は
仲間』始まるぜ！！」

第8話『Fの思い／仲間は仲間』

リュウセイ達が学校にいる頃、レン達は・・・

渡「まず、貴方達のデバイス名などを決めます」

神「セナは渡に頼んでくれ」

レン「てことは、俺はクソ爺か」

神「またいわれた・・・」

渡（神、頑張つて下さい）

神「ま、まあ気にせずGO！」

・・・神&レン・・・

神「で、まずはデバイス名からじゃ」

レン「ok。デバイス名は・・・「ウイング」で」

神「ふむ、魔力は？」

レン「SSSSでいいや」

神「でいいやって・・・。次はデバイスの種類じゃ」

レン「種類は・・・インテリジェントデバイス」

神「待機時は？」

レン「待機時は・・・そうだなあ・・・鳥のマークが刻まれているプレスレットで頼む」

神「了解じゃ。バリアジャケットは？」

レン「初バトルのの時に良い」

神「わかった。ならこれであっちの世界に行くためのことは大体すんだな」

レン「早いな」

・・・渡&セナ・・・

渡「では、まずはデバイスの名前を」

セナ「ん〜・・・「ブラツカー」・・・かな？」

渡「次は魔力です」

セナ「魔力は・・・SSS」

渡「ではデバイスの種類は？」

セナ「どうしよっかな・・・サヨは何にしたんですか？」

渡「フィ・・・サヨはインテリブーストデバイスです」

セナ「じゃ、私もそれで」

渡「分かりました。待機時の時はどうしますか？」

セナ「黒の指輪で、真ん中に白い・・・何て言うか・・・宝石？まあ、そんな感じのものを」

渡「では最後に、バリアジャケットは？」

セナ「初めてのバトルの時に考えます」

渡「それでは、あとは家などの事についてです」

・・・第三者・・・

神「家は・・・リュウセイ達の近くにあるからな」

渡「それと、明日からは二人に学校に行ってもらいます」

レン・セナ「・・・やっぱりですか？」

神「当たり前じゃ。リュウセイ達がいってて、お主らが行かないと
いうのはおかしいじゃろ」

レン「だな・・・」

神「それでは早速、レッツGo！」

神が言うと灰色のオーロラが現れた

渡「あ、最後に、サヨの名前はあっちでは「フィリア」ですの。
そこら辺はよろしく願いますね」

レン・セナ「はい」

セナ（だからさっき、渡さんフィリアって言おうとしたんだ……。納得）

二人は返事をし、灰色のオーロラに包まれた

……リュウセイ……

ああ、家ってやつぱり良いなあ。え？もう始まつてるの？てか俺らサイドなの？まあとにかく、俺とフィリアは学校から帰ってきて、只今家でくつろいでおります

フィリア「なんか久しぶりだね、こんなに二人でゆっくりするのってさ」

リュウセイ「だな。ま、怪人が出ないって事は平和なんじゃねえのか？」

と、その時

フィリア「！……リュウ、ショッカー戦闘員が分かんないけど来たよ」

戦闘員って……弱くない？

リュウセイ「さて、いくか！」

こうして俺とフィリアは戦闘員がいる場所へ向かった

・・・フィリア・・・

ファンガイア「やっと来たな・・・。次元の本棚の持ち主！」

フィリア「だから何？やっぱりあんたらの狙いは、私なのね」

オルフェノク「よし、いけ！」

戦闘員「イー！」

フィリア「こんの・・・。雑魚があああ！」

私は戦闘員に跳び蹴りを放った。え？セットアップ？してないけど。だってリュウもそうだし

戦闘員「イー！？」

リュウセイ「・・・弱。相手にならない」

フィリア「セットアップ！」

リュウセイ「早く終わらせるか・・・セットアップ！」

フィリア「くらえ！ミステイイイイ・・・バスタアアアア！」

リュウセイ「燃え上がれ、炎！」

おお、火柱がたった。って、あぶない！

フィリア「危ないよ！リュウ！」

リュウセイ「ごめん！」

オルフェノク「ほお・・・なかなかやるな」

ファンガイア「さて・・・と、俺らもいくか！」

オルフェノク「忘れるなよ、今回はあいつらを倒すんじゃない。次元の本棚を持つあいつを連れて行くんだ」

ファンガイア「わかってるよ！」

フィリア「！リュウ、あっちも来るよ！」

リュウセイ「わかった！」

フィリア「召還！炎の都を守りし龍！ドラゴン！水の都を守りし龍！アクアドラゴン！」

リュウセイ「よし、力を借りるぞ！ドラゴン」

ドラゴン『承知した』

フィリア「行くよ、アクア！」

アクア『分かりました』

ファンガイア「く・・・」

オルフェノク「いったんひけ！」

ファンガイア「命令すんな！」

リュウセイ「逃がすと思うか!？」

ファンガイア「く……!どうするんだ!？」

オルフェノク「だからいったんひく……」させるかあ!」「ぐあ!」

リュウセイ「お前らに俺たちがここにいることを組織に知られたら厄介だ!」

フィリア「私は、これ以上大事な人を失いたくないから……だから!そのためにも、あんた達をここで始末する!」

リュウセイ(あいつは……俺より酷く傷ついてるかもな……)

フィリア「バインド!」

ファンガイア「なに!？」

リュウセイ「……バインド」

オルフェノク「くっそおお!」

フィリア「ウイングサンダー……」

リュウセイ「ドラゴンファイアー……」

リュウ・フィリ「ブレイカアアアアアア!」

ファ・オル「ぐわああああああ!!」

終わった・・・でも、私はこれからも狙われる・・・私はどうすればいいの・・・?

そして私とリュウは家に帰った

・・・第三者・・・

何だかんだで次の日・・・午前6時30分

リュウセイ「ふぁ・・・ん?もうフィリアは起きてんのか・・・早いな」

フィリア「あ、起きた?リュウ」

リュウセイ「ああ、おはよう」

フィリア「おはよう 今朝ご飯作ってたから」

リュウセイ「わかった。俺も着替えたらそつち行く」

フィリア「りょくかい」

そのころレンとセナ・・・

レン「あ、おはよう。セナ」

セナ「おはよう、レン君」

レン「今日から二回目の学校だな」

セナ「だねえ〜・・・あ、お弁当は作っておいたからね」

レン「わかった。お前の料理はうまいからな。将来良い嫁になれるぞ」
頭を撫でつつ

セナ「／／じゃあ、誰のお嫁さん？／／」

レン「へ？」

セナ「私はレン君じゃないといやだからね？」
涙目&上目遣い

レン「／／わ、わかってるよ！／／／」

セナ「あ、朝ご飯出来てるよ」

レン「じゃ、食べるか」

セナ「うん！」

大人のカップルみたいな会話をした二人でした

リュウセイとフィリアは・・・

リュウ・フィリ「いただきます」

リュウセイ「やっぱりうまいな。お前の料理」

フィリア「ありがとう」

まあ、こっちもラブラブだったそうぞ。そしてご飯が終わり

リュウセイ「じゃ、学校に行くか！」

フィリア「うん」

学校に向かったとき

レン「・・・ん？あ、リュウセイとサ・・・フィリア」

セナ「え？ホントだ」

レン「おい、神」

神「なんじゃらほい？」

レン「俺らいつ行けば良いんだ？」

神「そろそろ校長室に行く時間じゃな。送っていくからな」

セナ「なんで？」

神「リュウセイとフィリアに見つかるかもしれないからな」

副音声：面白いのが見られそうじゃからな

セナ「もしかして、学校で会えて事なの？」

神「もちろんじゃ。あ、ちなみにリュウセイ達と同じクラスじゃからな」

レン「わかった。じゃあ、早く送ってくれ」

神「ほいほい」

すると灰色のカーテンが現れ、二人を包み込んだ

そのころ、リュウセイ達のクラス・・・

リュウセイ「はあ・・・何で学校なんてあるんだよあゝ・・・」

フィリア「悲痛な叫びをしないの・・・」

リュウセイ「だってよあゝ・・・」

先生「はい、静かに静かに。また転校生が来たので紹介します」

所々から、「誰だろあゝ？」とか「一人かな？」などザワつく

先生「静かに。それでは入って来て下さい」

そういつて入ってきたのは・・・

・・・リュウセイ・・・

また転校生か・・・誰だろうな？

先生「それでは入って来て下さい」

俺とフィリアは教室に入ってきた転校生をみて、

リュウ・フィリ「はあ!？」

俺とフィリア思わず声を上げてしまった

先生「？それでは自己紹介をして下さい」

レン「秋川レンだ。よろしく」

セナ「霞河セナです。よろしくお願いします」

はあああ！？え！？ちよつま、はあ！？何がどうなったらこんなことになるんだよおおお！！

先生「二人の席は・・・フィリアの隣の二つの席あいているから、そこに座ってね」

レン・セナ「はい」

フィリア「（リュウ、二人とも助かったんだね・・・）」

リュウセイ「（ああ。良かった・・・）」

・・・第三者・・・

休み時間・・・

アリサ「ねえ、さっきどうしたの？」

なのは「二人とも急に声あげるからびっくりしたよ」

すずか「知り合いなの？」

リュウセイ「ああ……」

フィリア「まあ……ね」

質問攻めされているレンとセナは……

レン「……うるさい……」

セナ「お、押さえて！レン君！」

レンがきれそうになっているのをセナが押さえているようだった

フィリア「はいはい、ちょっとどけてね」

レン「よお。リュウセイ、フィリア」

リュウセイ「お前はちよつとこっちに来い」

レン「……怒ってるか？もしかして」

リュウセイ「怒ってる？なんのことかなあ？」

レン「いやいやいや！絶対怒ってんだろ！その笑顔が逆に怖い！」

リュウセイ「全然怒ってないよー」 棒読み

レン「棒読みだし！ぜってー怒ってるって！」

リュウセイ「だ・か・ら、怒ってないってば」

レン「怖い！めっちゃ怖いからその笑顔！もう、逃げるが勝ちだ
ああ！」

リユウセイ「あ、ちょっと」O H A N A S H I『するだけだ
からあ〜！』

レン「お話ならいいけど、」O H A N A S H I『はいやだあ
！』

フィリア「セナ、久しぶりだね」

セナ「うん、久しぶり。フィリアちゃん」

フィリア「フィリアでもいいよ？」

セナ「そお？」

フィリア「うん」

セナ「じゃあ、そうさせてもらおうね。フィリア」

なのは「こっちはほのぼの」

すずか「あっちは・・・」

アリサ「カオス？」

なのは「カオスかな？」

すずか「カオスなのかな？」

なのは「って、暴力は駄目なの！」

フィリア「大丈夫だよ、なのは。よく二人の表情みてみて」

なのは「え．．．？」

セナ「笑顔でしょ？二人はふざけてやってるんだよ．．．」

フィリア「久々にあえて、凄く嬉しいんだよ。きつと．．．」

セナ「私達も、久々にあえて嬉しいからね」

なのは「そんなに仲良しなんだね」

フィリア「．．．．．」

セナ「？フィリア？」

フィリア（私がここに居ない方が、これが続くのかな．．．）

セナ「どうしたの？」

フィリア（私が居たら．．．この平和がいつまで続くか．．．シヨツカーが現れるのは、この世界を支配するためそして．．．シヨツカーに私を入れさせるため．．．私はどうしたら．．．）

セナ「フィリア、どうしたの？さっきから俯いて」

フィリア「え？あ、何でもないよ」

セナ「？」

フィリア（今は・・・心配させたら駄目・・・。私は、いつかみんなから離れて、みんなをショッカーから狙われないようにしないと・・・）

セナ「（フィリア、もしかしてショッカーに狙われてること、気にしてる？）」

フィリア「っ！！」

セナ「（図星ね・・・）」

フィリア「（まあ・・・）」

セナ「（何かあったらいつてね。力になるから）」

フィリア「（セナ・・・）」

セナ「（それに・・・）」

フィリア「（？）」

セナ「（みんなから離れるとか駄目だよ？）」

フィリア「（うっ・・・）」

セナ「（また図星・・・あのね、貴方が居なくなったりリュウ君はど
うすんの？あとね、貴方はここに居て良いんだからね）」

フィリア「……………うん。ありがとう、セナ……………」

セナ「（ふふ、親友なんだから当たり前でしょ）」

そのころ……………

リュウセイ「だ・か・らあ！なんで逃げるの！？ただ『O H A N A S H I』したいだけなのに！」

レン「だからそれがいやなんだってばああ！」

リュウセイ「お前が悪いんだろお！」

レン「なんでそうなるんだよおお！これは、すべて神がわるいんだあああああ！」

まあ、この後結局捕まって、『O H A N A S H I』されたの
でした。そして、神はと言つと……………

神「ほおっほおっほおっ、面白いのがみれたわい」

と、よろこんでいたそうぞ

第8話『Fの思い／仲間は仲間』（後書き）

作「さ、ねよねよ……ZZZ」

レン・セナ「はや！」

リュウ・フィリ「もう慣れた……」

リュウセイ「てかさ、今回のタイトル、W出てないのにWみたいだね」

フィリア「確かにね」

リュウセイ「さて、作者が寝たから、解散」

フィリ・レン・セナ「もう解散!?!」

リュウセイ「しゃーねーだろ。ま、とにかく作者が考えた台詞、言ってみよう！せーの！」

リュウ・フィリ・レン・セナ「結ばれた絆は永遠に！」

フィリア「なお、毎回毎回決めぜりふが変わります！次回もお楽しみー！」

レンとセナの設定を伝えよう！（前書き）

作「今回は！レンとセナの設定紹介！」

リュウセイ「お前さ、キャラが増えるたびにこんな事やるのか？」

作「あ、それはまだ考えてない」

リュウ・フィリ・レン・セナ「考えとけ！」

作「は、はい！」

レンとセナの設定を伝えよう！

名前 秋川 レン

変身するライダー ナイト

容姿 ちよつとカッコイイくらいの顔立ち。髪は肩より少し、短いくらいの黒髪。背は平均よりは少し高い。目の色は茶色

親は小さいときに交通事故で亡くし、それから保護施設で育った。その時にセナと出会った。最近海鳴市に引っ越してきた事になっている（セナも同じ）

性格 優しく、頭がよく、スポーツ万能なため、女子からも男子からも尊敬されている。カッコイイからモテるが、気にしない。フラグを立てたことには気づくため鈍感ではない

好きなこと スポーツ

嫌いなもの 仲間をバカにする奴。人を傷つける奴

魔力 SSS

デバイス

名前 ウイング

種類 インテリジェントデバイス

待機時 鳥のマークが刻まれているブレスレット

使用時 ダークバイザー

バリアジャケット 紺色のマントにうすい紫色のシャツ。白のパーカー、ジーパン。左腰にはダークバイザーが下げたてある

技は、ナイトのカードを使う（ナイトサバイブ時のカード、魔法も可）

名前 霞河 セナ

変身するライダー リュウガ

容姿 可愛い顔立ちで、髪は背中真ん中より少し長い。色はあざやかな薄紫。背はなのは達より少し高いくらい。目の色は、透き通るような黄色

性格 優しく、人思い。可愛いからモテるのだが、別に気にしていない。普段は怒らないが、怒るともの凄い怖い。レンと同様、スポーツ万能

好きなこと 料理・スポーツ

嫌いなもの 人を傷つける奴

魔力 SSS

デバイス

名前 ブラッカード

種類 インテリブーストデバイス

待機時 黒い指輪

使用時 ブラックドラグバイザー

バリアジャケット 紺色のマントに水色のパーカー、白のシャツ、
そして黒のミニスカート（StrikerSフェイト的な？）ブラ
ックドラグバイザーは左腕に装備される

技はリュウガのカードを使う。（魔法も可）

レンとセナは恋人同士

レンとセナの設定を伝えよう！（後書き）

作「かーしゃーくしゃーのしゃーにゅーにゃー」

リュウセイ「……作者、戻ってこい！」

作「なあああにいいい？」

フィリア「何で変なこといつてるの？」

作「何となく」

リュウセイ「何となくって……」

作「うえーいウエイ、うえーいーい！」

フィリア「戻ってきなよ……」

リュウセイ「暴走してるな……」

作「うえーいくあーつぶ！ウエアウエアウエー！」

リュウ・フィリ「……次回もお楽しみに」

第9話『3人娘家に来たり！ピンチの時はミラーワールドに！』（前書き）

作「^-^」

リュウセイ「何故笑ってる？」

作「なんとなく（^-^）」

フィリア「……………どうでもいつか。第9話『3人娘家に遊びに来たり！ピンチの時はミラーワールドに！』、始まるよ！」

第9話 『3人娘家に来たり！ピンチの時はミラーワールドに！』

――第三者――

レンがリュウセイに『O H A N A S H I』さね、お昼が終わり帰りの時刻

リュウセイ「やっと帰れる〜」

フィリア「（リュウあのおさ、気を抜いてるときに言うのは何だけど・・・）」

リュウセイ「（なんだ？）」

フィリア「（今日なのはは遊びに来るんだよ？）」

リュウセイ「（・・・死んだ・・・）」

フィリア「（いやいやいや！そんなに大変な事じゃないでしょ！）」

なのは「ねえねえ、今日遊びに行っていていいんでしょう？」

リュウセイ「あ、それが・・・」うん。いいよ・・・」

フィリア「1回家に帰ってから来るんでしょう？」

なのは「うん。それで、すずかちゃんとアリサちゃんもいい？」

フィリア「いいよ」

リュウセイ「そんなにおお・・・いいいよね?」・・・はい」

フィリア「じゃあ、私とリュウセイも一緒に行くから」

リュウセイ(女の中に俺1人・・・もう・・・どうにでもなれ・・・)

もう絶望に落ちる寸前だった。その時、リュウセイに希望の光が!

レン「早く帰ろうぜ」

セナ「そっだよ」

リュウセイ「レン! いいとききた! こっちこい!」お話だから!

レン「お話」だな?」

リュウセイ「ああ。『お話』だ」

レン「じゃ、ちょっと行ってくる」

セナ「いつてらっしゃい。・・・で、何の話してたの?」

フィリア「今日、なのはとすずかとアリサが家に来るの」

セナ(ああ・・・そういうことね、リュウ君がレン君連れて行ったのは・・・)

すずか「どうしたの? セナちゃん。苦笑いして」

セナ「え？なんでもないよ」

アリサ「え〜？絶対なんかあったでしょ〜？」

セナ「な、ないよ！」

アリサ「素直に教えなさい！」

セナ「はいはい・・・えつと、私がさっき思ってたことは、リュウ君がレン君を連れて行った理由が分かって、それで苦笑いしてたの」

なのは「じゃあ、連れて行った理由って？」

セナ「それはね、リュウ君、フィリア、なのは、さすが、アリサ。女だけでしょ？ほとんど」

全員（セナ以外）「あ・・・」

フィリア「そう言う事ね」

セナ「そう言う事。私もいっていい？」

フィリア「うん、どうせレンも来ると思うから」

その頃リュウセイとレン・・・

リュウセイ「今日遊びに来るメンバーが女だけなんだ・・・」

レン「で？俺になにしろと？」

リュウセイ「お前もこいつてこと」

レン「でも、2人だけだぞ？」

リュウセイ「2人の方がまだましだつて。前の世界で、みんな俺のこと『かっこいいけど、女顔で可愛い』っていつてたる？」

レン「あつたなあ、そんなこと」

リュウセイ「だから、絶対女装させられるつて！」

レン「……引き受ける。お前んちにいく」

リュウセイ「ありがたい……！」

レン「あれはさすがに……な」 苦笑い

リュウセイ「だろ？」

そしてフィリア達は……

フィリア「あ、そうだ。リュウつてね、幼稚園の時みんなに女顔つて言われてて、女装させられてたんだよ！」

セナ「あれは可愛かった！」

なのは「みてみたい！」

すずか「うちも」

アリサ「アタシも！」

フィリア「じゃあ」

セナ「決定！」

リュウセイ「……やっぱりな。それが目当てか！」

レン「落ち着けて、リュウセイ」

リュウセイ「ぜってーやらないからな！」

フィリア「私のお願いでも？」

リュウセイ「ああそうだ！ぜってーやんねえ！なんと言われようが！無理にやらせたらお前らと二度と話さないからな！たとえフィリアでも！」

レン「……どんだけ怒ってんだよ」

セナ「かえろよ。時間なくなるから」

フィリア「だね。てことでかえろー！」

リュウセイ「ぜってーやだ！」

レン「分かったから落ち着けて！」

その後、なのは、アリサ、すずかの家によって、リュウセイとフィ

リアの家に行った

リュウセイ&フィリアの家

なのは・アリサ・すずか「お邪魔しま〜す」

リュウセイ（さあ、地獄の始まりだ！）泣（）

レン（・・・ドンマイ）

アリサ「でさあ、どうする？何着せる？」

なのは「ん〜・・・あ！これは？」

フィリア「いいねえ〜」

リュウセイ「・・・」 逃げる！

セナ「あ！逃げちゃったよ!？」

フィリア「自分の部屋じゃない？」

レン（ふう・・・あいつも大変だな・・・でもなんか、いやな予感が・・・）

セナ「じゃあ、レン君ですか？」

レン「おいこらあああ!？」

フィリア「だね。恨むんならリュウを恨んでね」

レン「絶対いやだ！」 逃げながら

なのは「レン君足早いの！」

フィリア「じゃあセナ、よろしく！」

セナ「オツケ」

フィリア「私たちはゆっくりしてよ」

すずか「うん、そうだね」

その頃、レンとリュウセイ

リュウセイ「……………あ、レン」

レン「はあ……………はあ……………お前が逃げたから俺が女装されそうになっただろうが！」

リュウセイ「マジ!? ごめん! だから見捨てないでええええ！」

レン「いや、見捨てねえから」

セナ「レンくん! ど〜こ〜!?」

レン「ちっ! もう来た」

リュウセイ「どうすんだ?」

レン「……………ミラーワールドへ」

リュウセイ「……………それしかないな」

レン「もうちょっと離れた場所で……………」

とって、2人は今いたところから離れ

リュウ・レン「変身」

龍騎「早くいこ」

ナイト「ああ」

2人がミラーワールドに入った瞬間をセナは見ていた

セナ「いや、あれは無しでしょ!?!……………もういいや!変身!」

龍騎「ん?誰か来た……………って、リュウガーーーー!?」

ナイト「セナだ!」

龍騎「マジですかあー!?はやくいえよー!」

ナイト「言ってる暇があったら逃げるぞ!」

リュウガ「あ!まてえ!」

龍騎「待てと言われて待つバカは何処にいるー!」

ナイト「お前とだけは戦いたくないからあきらめろおおお！」

リュウガ「じゃあ、そっちがあきらめなさあああいい！」

龍騎・ナイト「絶対やだー！」

リュウガ「とまらないと・・・！」

<ソードベント>

龍騎「狙いは俺かああ！どわあああ！」

ナイト「・・・がんば」

龍騎「もうやだあああ！」

リュウガ「だったら、大人しく女装しなさあああいい！」

龍騎「それもいやだあああ！」

ナイト「・・・俺家に戻ろっかな？」

といて変身をとぎ、自分の家に帰った

龍騎「ああ！逃げやがった！」

リュウガ「うっそー！？でも、リュウ君が捕まればいいの！」（ど
うしようか・・・あ！てか最初からこれすれば良かったじゃん）

龍騎「女装するぐらいなら死んでやるうううう！」

リュウガ「さっせなっいよー バインド！」

龍騎「はぁぁ！？無し無し！これ無し！」

リュウガ「リュウ君捕獲完了」

そして強制的にミラーワールドからだし、フィリア達のところへ行
ったとさ

・・・リュウセイ・・・

はぁ・・・結局捕まった・・・

フィリア「あ、帰ってきた！」

アリサ「よく捕まえたわねえ」

セナ「苦労したよ」

皆さん笑顔ですね・・・だけど！あいつに頼めば何とかなる！

リュウセイ「（レン、今からこっちに来てこいつらを説得してくれ
！）」

レン「（結局捕まったのか。まあどうでもいいか。んじゃ今から行
く）」

そんでもって、一分後・・・

なのは「あれ？誰かきたよ」

レン「リュウセイ？」

はや！くんのはや！

リュウセイ「レン、頼む」

レン「はいはい」

セナ「レン君が代わりにするの？」

レン「俺とリュウセイに女装させた奴はフルボッコ。そしてこれからずっと話さない。そして最後に待っているのは……」

セナ「駄目！それ以上言わないで！」

フィリア「こわい！こわいからあああ！！」（泣）

なのは「うっ……ヒック……怖いよぉ」（泣）

アリス「こ、こんなにこわいの……？」

すずか「えっと……その……ごめんなさい」

レン「こわ！さすが前の世界で学校で行われた『怖い話がうまいのは誰だ！決定戦！』で一位とった奴だ……あ、どんなんだよってツッコミはなしで！」

レン「分かればよし。セナ、かえるぞ」

セナ「ひゃ、ひゃ〜い（泣）」

レン「たく、泣きやめって」

セナ「だって〜（泣）」

うわ〜お、桃色空間できあがり〜

アリサ・すずか「お、お邪魔しましたあ」

なのは「ヒック・・・ヒック・・・」

フィリア「うう・・・」

リュウセイ「もうしないよな？」

フィリア「うん・・・」

まあ、何だかんだで騒がしい1日が終わったぜ！

第9話『3人娘家に来たり！ピンチの時はミラーワールドに！』（後書き）

リュウセイ「酷い目にあうところだった」

レン「だな」

作「よお！（＾O＾／）今回はギャグだぜ！」

フィリア「あれのどこがギャグなのよ！」

作「ぜ〜くんぶ」

セナ「・・・レン君、あの子の台詞って・・・」

レン「気になるか？だったら教えてやる。俺が言おうと思ったのは『俺とリュウセイに女装させたらフルボッコな。あとこれから話さない。そして最後に待っているのは・・・地獄だ』って言うつもりだった」

セナ「聞かなきゃ良かった〜！（泣）」

フィリア「うわああああん！」

リュウセイ「・・・かわいいなあ〜。おもしろいなあ〜」

フィリア「最後の言葉の意味がなんか違うよ！？言われても嬉しく無いんですけど!？」

リュウセイ「きにすんな。んで作者」

作「ホワッツ?」

リュウセイ「次回から無印だな?」

作「イエース!だ・け・ど、 とくつくキャラが居るので、

今回は サイド!」

リュウセイ「 って・・・」

作「そうです!人気の金髪ちゃん登場!」

レン「それってフェ「おっと?それ以上言ったら撃つよ?」・・・」

リュウセイ「・・・次回もお楽しみに!今回はライダーの台詞で!せーの!」

全員「運命の切り札を掴み取れ!」

リュウセイ「なぜ?」

作「いや、次回ブレイド出るから?」

リュウセイ「あっそ」

第10話『剣の名を持つ戦士／金髪ちゃん登場!』(前書き)

ええ、今回出るブレイドの変身者ですが・・・オンドルン語では
ございません。

申し訳ありません(ペロ)

第10話 『剣の名を持つ戦士／金髪ちゃん登場!』

ある日の夜、フェイトは、自分の使い魔アルフと共にジエエルシードを探していた

フェイト「見つからなかったなあ・・・」

アルフ「そんなこともあるって!気にしないのそんなこと、フェイトは頑張ってるんだから!」

フェイト「そうだね、アルフ・・・。ありがとう。今日はもう帰ろう」

そう言ってフェイトとアルフは家に帰ろうとした、その時

「ジエエルシードをよこせ!」

フェイト「こいつは・・・?」

「よこせ!」

フェイト「くっ!」

フェイトは魔力弾を放つが・・・

「きくか!」

フェイト「なっ!?!?うわああ!?!?」

アルフ「フェイト！あんた・・・よくもフェイトを・・・！！」

「そこまでにしる！アンデット！」

アンデット「だれだ？貴様」

「こついう奴だ！変身！」

<ターンアップ>

アンデット「な！？ブレイドだと！？何故ここに！」

ブレイド「教える必要はない！はあ！」

アンデット「く！」

ブレイド「はっ！たあ！」

アンデット「があああ！」

ブレイド「これで終わりだ」

<キック サンダー マツハ ライトニングソニック>

ブレイド「はあああああああ！！！」

アンデット「ぐわあああああああ！！！」

アンデットは爆発した

ブレイド「また爆発した。てかこれで何体目だ・・・？」
と言いながら変身をとく

フェイト「あ、あの・・・」

「ん？ああ、怪我はなかった？」

フェイト「あ、はい。大丈夫です」

アルフ「ところであんた、何者だい？」

「俺は剣崎ツバサだ。そう言うお前らは？」

フェイト「あ、私はフェイト・テストロッサ、この子はバルディッシュ」

アルフ「あたしは使い魔のアルフ」

ツバサ「あ、フェイト敬語はいらねーよ。見た感じ同い年位だろ？ま、怪我がないならそれでいい。じゃ〜な〜」

フェイト「あ！ちょっとまってください！」

ツバサ「だから敬語じゃなくて良いっていったらだろ？・・・いてて」

フェイト「足に怪我してるの？」

ツバサ「まあ、これぐらいいたしたことない」

フェイト「でも……」

ツバサ「大丈夫だって」

フェイト「とにかく治療するから、家に。いいよね？アルフ」

アルフ「フェイトが良いんならあたしもいいよ」

そう言ってアルフはツバサを背中に乗せる

ツバサ「だから大丈夫だって何回言えば……」

フェイト「助けくれたお礼がしたいので」

ツバサ「……分かったよ」

こうしてツバサはフェイトの家に行った

第10話『剣の名を持つ戦士／金髪ちゃん登場!』（後書き）

作「アンケート!&募集!」

リュウセイ「……………うるさい」

作「ま、待って!もうしないから!」

リュウセイ「ちっ」

作「アンケートはこちら!」

ユーノをエロフェレットしたほうがいいか!＊締め切りは7月31日まで!

作「募集はこちら!」

今回出たツバサのデバイス名を大募集!魔法なども募集しています!
!＊締め切りは7月25日まで!

全員「よろしくお願いします!」

フィリア「じゃあ最後に、決め台詞言ってみよう!せーの!」

全員「輝く絆、ここにあり!」

番外編『すずかの出会い』（前書き）

作「5日振りに更新じゃー！ー！」

レン「今回はすっごく苦労したらしいな」

作「そりゃあしましたよ。あ、それと・・・紛らわしいのですが、前回フェイトがでて無印が始まっているのです・・・」

レン「まゝたわかりにくくかきやがって。無印が始まってるなら、今回はあれから3年後ってことか？」

作「まあ。でも詳しく言つと前回からあれから3年後ってことだね」

レン「紛らわしすぎる・・・」

セナ「でも、何で3年後？」

作「学校に行ってるから6歳のほうが良いと思って・・・」

セナ「じゃあ、みんな6歳？」

作「はい」

セナ「ふう〜ん・・・。とにかく、番外編『すずかの出会い』、はじまりま〜す」

番外編 『すずかの出会い』

リュウセイ達がなのはの世界に来てから3年後・・・

ここはとある道・・・そこには、今回の話の主人公(?)の月村すずか(9歳)が歩いていた

すずか「図書館にでも行こうかな・・・?この頃あんまり行ってなかったから」

すずかはご存じの通り、バイオリンを習っている。そして今もバイオリンはもっている。すずかが普通に歩いていると・・・

「うわぁ!?!」

すずか「きゃあ!?!」

曲がり角を曲がったら同じくくらいの男の子とぶつかってしまった

「いてて・・・あ、すいません、大丈夫ですか?急いでたので・・・」

と言いながらすずかに手を差し出した

すずか「あ、大丈夫です。ボケっつと歩いてた私も悪いので・・・」

「・・・もしかして、君ってバイオリン習ってるの?」

すずか「え?は、はい」

「へ……………」

すずか「えっと……………あなたは……………」

「あ、僕は紅ソウマです」

すずか「私は月村すずかです」

ソウマ「すずかちゃんか……………よろしくね!」

すずか「は、はい……………/ / /」

ソウマ「?すずかちゃんはこれから何処に行くの?」

すずか「図書館に行こうかと……………」

ソウマ「僕もなんだ。もしよかったら一緒に行く?」

すずか「あ、はい!」

こうしてすずかとソウマは図書館に行った

図書館

ソウマ「すずかちゃんって、よく図書館に来るの?」

すずか「でも、バイオリンの練習で……………そういえばソウマ君バイオリン習ってるの?」

ソウマ「習ってはいないんだ。一樣引けるけど・・・」

すずか「そっなの?」

ソウマ「まあ、どっちかっていったら作るほうなんだけどね・・・」

すずか「バイオリン作ってるんの?」

ソウマ「うん。あ、そっだ。これから僕の家くる?」

すずか「いいの?」

ソウマ「うん、いいよ」

すずか「じゃあ、ソウマ君のバイオリン、聞かせて?」

ソウマ「いいよ。じゃあ、早速いこっか」

すずか「うん・・・!」

紅邸・・・

ソウマ「ただいま」

すずか「お邪魔します」

ここでタイミング悪くあいつが・・・

「ソウマ〜。やっと帰ってきた〜」

ソウマ「キ、キバット！今出てきちゃ……」

すずか「……………コウモリが喋ってる」

キバットの姿を見て目が点になるすずか

キバット「コウモリとは何だコウモリとは…！」

ソウマ「いや、コウモリだから。……ああ、どうやって説明しよう……」

キバット「にしても、ソウマもやるようになったな。女の子を家に連れてくるなんて。もしかして、彼女か？ソウマ」

ソウマ「……ち、違うよ！キバット！……」

すずか「……………」

キバット「ホントか？」

ソウマ「……ホントだよ！……」

すずか「……そ、それよりソウマ君、このコウモリってなに？……」

キバット「俺様はキバットバット三世！キバットだぜ！よろしくな、嬢ちゃん」

すずか「よろしくね、キバット君。あと、嬢ちゃんじゃなくて私月

村すずか。だからすずかと呼んで」

キバット「ああ、分かった。これからよろしくな、すずか」

ソウマ「あ、ちょっとまってて。バイオリン持って来るから」

すずか「うん。……ねえ、キバット君」

キバット「なんだ？」

すずか「ここにはソウマ君とキバット君しかいないの？」

キバット「まあな」

すずか「親はいないの？」

キバット「ああ、母さんはいるが、この家にはいない」「（ソウマは会ったことあつたっけか……）」

すずか「学校には行ってないの？」

キバット「ああ、行ってねえ」

すずか「そうなんだ……」

ソウマ「お待たせ……って、何でそんなにしんみりしてんの？」

すずか「え？あ、何でもないよ！早速聞かせて、ソウマ君の演奏」

ソウマ「うむ」

ソウマが持っているのはもちろんのこと、ソウマの父親、『紅音也』の作った『ブラッディ・ローズ』。

ソウマ「じゃあ、弾くよ〜」

ソウマはバイオリンを弾き始めた。

〜〜〜（キバでおなじみのあの曲です！）

すずか「すごい・・・」

キバット「さすがソウマ」

演奏が終わり、ソウマは礼をした

パチパチパチ

すずか「凄いよソウマ君！」

キバット「さすがだな！」

ソウマ「ありがとう、2人とも」

すずか「ねえ、これから毎日来ても良い？」

ソウマ「もちろん、いいよ」

すずか「本当!?!」

ソウマ「うん またバイオリン聞く？」

すずか「うん！聞く！」

ソウマ「じゃあ、家まで送るよ。キバットもついできて」

キバット「何でだよ？」

ソウマ「いいから」

キバット（もしかして二人つきりがいやなのか？まあ、様子見るのも面白そうだな）「わかった。ついてくよ」

すずか「そうだ、ソウマ君今日家に泊まんない？」

ソウマ「……………え？い、今なんて言ったの？」

すずか「え、えっと……………」

キバット「一回目はつきり言ったんだから2回目もはいつつきり言えよ」

すずか「う、うん……………えっとね、今日家に泊まらない……………」

ソウマ「な、何で突然？」

キバット（あゝ……………駄目だこりゃ。鈍感だ……………）

すずか「あ！ソ、ソウマ君が良かったらだよ！？」

ソウマ「ん〜・・・僕は良いんだけど」

すずか「ほんと!?!」

満面の笑みでソウマを見るすずか。それに対してソウマは・・・

ソウマ「ノノノ、うん・・・ノノノ」

顔を紅くしていた。キバットは・・・

キバット（あの笑顔は反則だな・・・）

とか思っていた

ソウマ「でも、家の人には許可とったの?」

すずか「さっきメールでお姉ちゃんに送ったから」

キバット（いつのまに送ったんだよ!?!）

驚くキバットに対して・・・

ソウマ「返事は来たの?」

と、普通のソウマ。キバットは、（いつのまに送ったのかきにならないのかよ!?!）とか心の中でツッコミを入れたとかそうでないとか・・・

すずか「うん。いいよだって」

ソウマ「じゃあ、準備してくるね。と言っても、1日だけだけど・・・」

すずか「何日でもいいよ?」

ソウマ「・・・え?ごめん、もっかい」

すずか「だから、何日でもいいよ」

ソウマ「うーん・・・どうしよう・・・」(ファンガイアのこともあるからな)

キバット「2日でいいんじゃないのか?」

ソウマ「・・・はい?」(何考えてるの!?キバット!)

キバット(気づかないのかね)、ソウマは。なんで家にとまんないかっていったの)

ソウマ「キバット、ちょっと来て!」

キバット「あ〜ね」

すずか「???」

すずかから少し離れた場所で、ソウマはキバットに小声で説教(?)をしていた

ソウマ「2日の間にファンガイアが出たらどうすんの!」

キバット「別にいいじゃね〜か。たまには休めって。この頃ファン
ガイアが結構出てたし」

まあ、説教（？）おされてるキバットはいつつもどろりだったが・

ソウマ「でも……」

キバット「……すずか〜、ソウマが2日でオツケーだってよ
〜」

ソウマ「ちょっ、キバット!?!」

すずか「本当!?!ソウマ君!」

すずかはまた満面の笑みでいい、ソウマは……

ソウマ「え?あ……うん／＼」

また顔を紅くしていて、断れなかった。そしてキバットは……

キバット（だからあの笑顔は反則だ……）

とまた思っていたとさ

そして準備が終わり、現在すずかの家に向かっているすずか、ソウ
マ、キバット

すずか（はあ〜、どうしよう。今日会ったばかりなのに、ソウマ

君のこと好きになっちゃった！)

ソウマ(初めてだな)。女の子の家に行くの)

キバット(ソウマは気づくかね？)すずかが好きだって事。どうなるか楽しみだな)

すずか・ソウマ「……………」

ソウマ(何話せばいいか分かんない…………)

すずか「…………あ、あのさ、ソウマ君」

ソウマ「な、なに？」

キバット(お？)すずかの奴、もう言っのか？)

すずか「ソウマ君って、その…………す、好きな人っている…………？/ / /」

ソウマ「好きな人？うん…………」

キバット(いるだろう！？)何故悩む！)

ソウマ「すずかちゃんは、好きな人いるの？」

すずか「え？」

キバット(逆に聞いた。すずか驚いてるし)

すずか「え、え〜と・・・」(うう〜！まさか逆に聞いてくるなんて！言えるわけ無いじゃん！／／／／)

ソウマ「?どうしたの?すずかちゃん」

すずか「い、いや、何でもないよ・・・」

ソウマ「?それで、好きな人って?」

この時、キバットは(またきいた。いい加減、気付ってバカ)と思っていたとか

すずか(どうしよう・・・・・・もっいつちやえ!)

キバット(ガンバレ、すずか!)

すずか「／／あ、あのね、私の好きな人は・・・!／／」

と、その時

ファンガイア「ライフエナジーを寄せ!」

ファンガイアが現れた!

キバット(クロスケクロよりKYがいたあああ!)

ちなみに、ソウマとキバットは、クソ爺神様と渡に頼まれて別世界から来たので、リリなのことは知ってるよ〜

ソウマ(ファンガイア!?変身するにも、すずかちゃんが・・・)

すずか「な、何あれ……………」

キバット「ソウマー!」

ソウマ「でも……………」

キバット「いいから、やるぞー!じゃなきややられるぞー!」

ソウマ「……………わかった。すずかちゃんは、安全なところに隠れてて!」

すずか「ソウマ君は!?!」

ソウマ「あれは僕の専門だから!はやく!」

すずか「う、うん……………」

ソウマはすずかが隠れたことを確認して、ファンガイアに向き直った

ファンガイア「人を逃がして自分が犠牲になるのか?」

キバット「それはどうか?」

ソウマ「キバット!」

キバット「よっしゃー!いっくぜー!ガブっ!」

キバットがソウマの手に噛みつくと、ソウマの顔にステンドグラスの様な模様が浮き出ていて、腰にはベルトが現れた

ソウマ「変身！」

ソウマはキバットを逆さまに装着した。するとそこには仮面ライダーキバが立っていた

キバ「はっ！」

キバはファンガイアに蹴りをくらわせる

ファンガイア「ぐっ！貴様がキバか！」

キバ「だから何だ！はぁぁ！」

ファンガイア「ぐぁぁぁ！」

キバット「そろそろ行くぜ！ソウマ！」

キバ「うん」

キバット「ウェイクアップ！」

キバは腰からフェッスルを取り出し、キバットに吹かせた。すると辺りは暗くなる

キバットがベルトから外れ、右足の周りを飛び回ると、カテナが解かれた

キバ「はぁ！」

キバは上空へと飛び、ダークネスムーンブレイクを放った

ファンガイア「ぐあああああああ!!」

ファンガイアはがらすのように砕け散った

ソウマ「ふう……」

すずか「ソウマ君!今のって……」

ソウマ「すずかちゃんの家に行ったら話すよ……」

すずか「分かった」

キバット「で、すずかの好きな人は?」

すずか「え!?!えつと……」

キバット（あゝ。おもしろ〜）

意外とこういうのを楽しむんですね、キバット

キバット「ま〜な」

すずか「ノ、あ、あのね……私の好きな人は……ソ、ソウマ君なの!」

ソウマ「……え?ごめん、もう1回言って?」

すずか「ノ、だから、ソウマ君だってば!」

ソウマ「……ええええええええ！？ば、僕なの！？／／／」

すずか「／／う、うん……それで、ソウマ君の好きな人は……？」

キバット（もうカップルになるか？）

ソウマ「……………」

キバット「……だあああ！もう言うぞ、ソウマ！ソウマの好きな人はな、す……キバットのバカー……！」『ゴチン』……あだ！」

ソウマ「／／暗くなる前に早くいこ！／／」

すずか「ちよつと〜！教えてよ〜！」

キバット「待ちやがれ！ソウマ〜〜！」

何だかんだで騒がしい1日になったとか（笑）

その後、すずかの家に着き、ファンガイアとキバのことについて教え、すずかに上目遣い+涙目で頼まれ断れず、同じベットで寝たこと

番外編『すずかの出会い』（後書き）

作「今回って結構長いかな？」

レン「さあな」

作「それと皆様、紛らわしくてスイマセン・・・」

レン「まあ、許してはくれるだろう（多分・・・な）」

作「かな？・・・あ！そうだ。前回応募していたツバサのデバイス名は、刃の下に心在りさんとダークキバさんの意見で、聖剣や魔剣からとることにしました！」

レン「で？何にしたんだ？」

作「『エクスカリバー』通称『エクス』にしました」

セナ「『エクスカリバー』は分かったけど、『通称』ってなによ？」

作「『エクスカリバー』って長いから、ツバサは『エクス』って呼んでるの」

セナ「ああ、そう言う事ね」

作「そんじゃ、台詞を言おう！今回は龍騎の台詞で！せーの！」

全員「戦わなければ、生き残れない！」

第11話『フェレットとなのはとダークデイケイド』（前書き）

読んでくれているみなさま、長い間更新せず、申し訳ありませんでした！

今後このようなことが無いように気を付けます……。

作「魔王！死神！たぬき！ま・し・た！ましたま・し・た！」

リュウセ「……作者はいつてはいけないことを言ってしまった」

フィリア「どうなっても知らないからね」

作「え〜、今更ですが、アンケートの結果を發表します！」

レン「もう10月だぞ？」

セナ「締め切りは7月31日だよね？」

作「すいません！結果は、エロフェレットにはしません！」

リュウセイ「よかったな。ユーノ」

フィリア「それじゃあ、第11話」

レン「『フェレットとなのはとダークデイケイド』」

セナ「始まるよー！」

第11話『フェレットとなのはとタークディケイド』

……フィリア……

あれから私達は小学三年になった。そして今日はなのはがユーノに出会う日。まあ、まだ朝の6時だけだね。で、今はと言つと……

リュウセイ「おい、神〜！」

神「なんじゃ〜？」

リュウセイ「使い魔みたいなのがほしい」

神「なぜ？」

リュウセイ「朝にジョギングとかしたいから」

リュウ……キツパリ言つた

神「それだつたら別にいらんないんじゃないか……？」

リュウセイ「朝ご飯作る人は？」

神「フィリア！」

フィリア「いや、私もしたいんだけど……」

神「嘘だ……ウソダンドコドーン〜！」

リュウ・フィリ「いや、なんで剣フレイドの剣崎一真!? てか何でオンドウ

ル!？」

神「息ぴったりじゃな・・・てかなぜそのことを知っている？」

フィリア「次元の本棚。授業中暇だったから検索してた」

学校の授業簡単すぎて授業中暇なんだもんな。あ、ちなみに前の
龍騎の世界 世界での私達は、高校生だよ

神「授業中って・・・まあいい。さて、どうしようかなあ」

5分後・・・

神「うゝむ・・・」

さらに5分後・・・

神「ZZZ・・・」

リュウ・フィリ「って、寝るなあー!」

神「いて!何するんじゃ!」

リュウセイ「寝る方が悪い!」

神「眠いんだからしょうがないだろうが!」

リュウセイ「じゃあさっさと考えて家に戻って寝ればいいじゃないか!」

また始まった・・・リュウと神の口喧嘩。まあ、負けるのはいつも神だけだね・・・

神「そんなに簡単に決められたらこんなに考えんわ!」

フィリア「まあ、それはおいといて。どうなの? いいの? 駄目なの? どっちなの?」

神「うゝむ・・・・・・・・・・・・・・・・よしわかった」

リュウ・フィリ「簡単に答え出てきたよね」

簡単に答え出るんなら最初からそうしようよ。無駄な十分だったじやん

神「気にしたら負け。じゃあ、まずは性別から」

気にするから。こいつバカ・・・・・・・・あ、元々が

リュウセイ「言わなくても分かるだろ」

神「はいはい、リュウセイが男でフィリアが女・・・でいいか?」

フィリア「オッケー」

神「次は名前」

リュウセイ「俺はライムかな」

フィリア「私はエレナで」

神「じゃあ、なのはたちと会う時は？」

リュウセイ「俺は子犬」

フィリア「じゃあ狐」

神「ふむ、後ほかには？」

リュウセイ「狼、狐、ドラゴンにもできるようにして」

フィリア「私の方は元々狐だから、子犬にできるようにで、後はリュウと同じでお願いね」

神「わかった。終わったらそっちに送るからな」

フィリア「じゃあね〜。……………で、どうするっ」

リュウセイ「なにが？」

フィリア「なのはとユーノのこと。私たち4人全員いくの？」

リュウセイ「うん……………。ショッカーがいつ来るか分からないからな……………」

確かにそうだな〜。なのはの方に言ってる時にショッカーが来たら困るからなあ……………

フィリア「じゃあ、その時になったら決めようか」

リュウセイ「だな。さて、朝ごはん食べてさっさと行くか！」

フィリア「そうだね」

・・・第3者視点・・・

リュウセイとフィリアが神と話している時、レンとセナは・・・

レン「……………なぜだ？」

そう呟くレンの隣には……………

セナ「くう……………くう……………」

気持ちよさそうに寝ているセナが居た

レン「昨日寝る時はセナは自分のベッドにいた……………ここは俺のベ
ットのはず……………」

考えてもなぜか分からないレン

レン「まあ、気持ちよさそうだし、このままでいいか」

そういいながらレンはセナの頭を撫でる

レン「さて、どうするか……………まだ6時だからな……………」

セナ「ん……………レン君……………？」

レン「おはよう、セナ」

セナ「おはよう」

レン「まず聞きたいのは、なぜ俺のベットにいる？」

セナ「えっとね、・・・私たちの世界の最後の日・・・覚えてるよね？」

レン「当たり前だ。忘れるわけないだろ」

セナ「夢でそれを見て・・・目さましちゃって、なかなか眠れなくて、レン君のベットで寝てたの・・・えと・・・その・・・ごめんね・・・？」

レン「謝らなくていい。別に気にしてないから」

セナ「ありがとう、レン君」

レン「さて、今日はなのはがユーノと会う日だ。リュウセイとフイリアと相談しないとな」

セナ「そうだね。じゃあはやく準備しようか」

レン「ああ」

・・・セナ・・・

時間は過ぎて学校。ちなみに今はお昼です。いきなり飛ばしてすいません

なのは「将来かぁー」

ああ、先生が言ってたっけ

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんは今結構決まってるんだよね？」

退屈だなあ

アリサ「うちは、お父さんもお母さんも会社経営者だし、いっぱい勉強してちゃんと跡を継がなきゃ…くらいだけど？」

すずか「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなあ…って思ってるけど」

なのは「じゃあ、リュウセイ君たちは？」

セナ「ほえ？」

まさか回ってくるとは…

リュウセイ「別に……」

レン「俺も特にないな……」

フィリア「私もー」

セナ「特になし。考えたことなかった」

アリサ「少しは考えなさいよ……」

セナ「ははは……」

アリサ「なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

アリサちゃんの言つとおりだよね……。……。美由希さんは……。ね。あれだから……。

なのは「それも将来のヴィジョンの1つではあるんだけど……」

ああ〜はやく終わらないかな〜

フィリア「(ねえ、今日どうするの?)」

セナ「(どつする?)」

リュウセイ「(うう〜ん……)」

ああ……。シヨッカーさえいなければ……!

レン「(……。誰か2人なのはのほうにいつて、残りの2人が家で待機……。で良いんじゃないか?)」

流石レン君!

リュウセイ「(じゃあ、俺とフィリアが待機……。でいいか?)」

フィリア「(私はいいよ)」

セナ「（私も）。レン君は？」

レン「（俺もそれで良いと思う）」

んじゃ決定！

――レン――

今は帰り。やっとなのはがユーノに会うときか。長かった……

アリサ「ああ！こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

すずか「そうなの？」

アリサ「ちょっと道わるいけどね」

リュウセイ「（んじゃ、俺とフィリアは家に帰る）」

フィリア「（後はよろしくね）」

レン・セナ「（わかった）」

リュウセイ「俺とフィリアはこのまま家に帰るから」

なのは「あ、そっか。リュウセイ君とフィリアちゃんそっちだもんね」

フィリア「うん、もうちょっと話したかったけど……」

すずか「じゃあ、明日ね」

リュウセイ「ああ、じゃあなー」

フィリア「また明日」

そしてリュウセイとフィリアは家に向かって歩いていった

アリサ「あれ？そう言えばセナとレンはなんでこっちなの？塾かよってないじゃない」

セナ「あ、いや・・・」

レン「近道かなんだか知らないが、こんな物騒な道を女だけで行かせるか？普通」

なのは「にははは・・・」

すずか「ありがとう」

アリサ「怪しいわね・・・何か隠してるんじゃないの？」

セナ「な、何のこと？」

こいつ、無駄に感が鋭いんだよな・・・

アリサ「動揺してるってことは、何か隠してるってことよね？」

これから起こる出来事言えるかっつーの

すずか「アリサちゃんは深く考えすぎだよ」

なのは「そうだよ。いきなり聞かれたりしておどろくことと違ってあるでしょ？」

アリサ「うっ……そうね」

レン「……助かった」

すずか「なのはちゃんさつきからキョロキョロしてたけど、どうしたの？」

なのは「え？……そ、そうかな？」

すずか「うん、そうだよ。何か不安なの？」

なのは「ううん、大丈夫」

すずか「なら良いんだけど……」

なのは「心配してくれてありがとう、すずかちゃん」

セナ「（そろそろだと思っただけど……）」

確かこの辺で……なのはがたちどまった。気づいてきたか？

すずか「どうしたの？」

アリサ「なのは？」

なのは「あ、うん。何でもない。ごめんごめん」

すずか「大丈夫？」

なのは「うん！」

アリサ「じゃあ、行こう」

さて、もうちょっとだな。後は何もなければ良いんだが・・・

なのは「まさかね・・・」

いやな予感がする・・・

すずか「なのはちゃん！」

こっちにショッカーは出てこないよな

なのは「あ、うん！」

セナ「・・・レン君、・・・もしもだよ？ここでショッカー出たらどうする？」

さすがになのは達の前で堂々と変身や魔導士になれないから・・・
・・・だから、

レン「(リュウセイ達に頼むしかないだろ)」

これしかできないだろ。例え物陰で変身しても、何してたのか聞かれるから・・・特にアリサ

セナ「(だよな。私リュウ君に伝えとくよ)」

レン「(ああ、わかった)」

来ないのが一番良いんだがな

……リュウセイ……

家についたけど特にすること無いな……

フィリア「暇だな……」

リュウセイ「そうだなあ……」

フィリア「……そうだ!」

リュウセイ「おわ!?いきなり大声出すな!」

フィリア「ご、ごめんごめん」

リュウセイ「で、何か思いついたのか?」

フィリア「うん。ピアノひこうかなあ……って思って

リュウセイ「なるほど。じゃあ、俺はきいてるから」

フィリア「オツケ」

軽く返事をしてから準備を始めるフィリア

フィリア「何ひこつかな〜・・・今は無印だから・・・やっぱ
Innocent starterか！」

〜
〜
〜

いつきいてもいい曲だなあ〜・・・

セナ「(リュウ君?)」

リュウセイ「(ん?ああ、セナか。どうした?)」

セナ「(あのさ、もしこつちにショッカーきたら、お願いしていい
?)」

リュウセイ「(え?なんで?)」

セナ「(だって、なのは達に逃げてもらったとしても、何してたか
しつこく聞かれるでしょ?特にアリサちゃん)」

リュウセイ「(ああ〜、なるほどね。オツケー、大体分かった)」

ん?それは門矢士の台詞だつて?ま、きにすんな!

セナ「(じゃあ、よろしくね〜。あ、フィリアにも伝えといてね)」

りょうか〜いっと

フィリア「リュウ？どうしたの？」

リュウセイ「今セナから連絡があつて、シヨツカーが来たら連絡するからきてくれだって」

フィリア「へ〜。じゃあ……そうだ、お菓子とか作つて待つてよ！」

リュウセイ「そうだな」

シヨツカーは来ないと祈ろう

……第三者……

セナはリュウセイに連絡を終え、レンと普通に話していた

セナ「あ、そうだ。レン君は今日の晩ご飯何がいい？」

レン「別に何でも良いんだが……」

セナ「ええ〜……それだと私が困るんだよ（涙目）」

レン「……わかった、考えておくから泣きそうな目はやめてくれ……」

……夫婦みたいな会話をしていると、なのはが急に立ち止まった

アリサ「なのは？」

<アタック……ブラ・ト>

レン「っ！！アリサ、伏せる！」

アリサ「はぁ！？」

レン「いいから！早くしろ！」

アリサ「わかったわよ！」

そう言つてアリサはしゃがんだ。その時・・・

ギュバン！

アリサの頭上を、黒色の弾丸が飛んでいった。レンは攻撃が打たれたであろう場所をみた。そこには、木に隠れた何者かの姿・・・

レン（来やがった・・・！）「セナ！リュウセイに連絡しろ！あつちに誰かがいた気がするからみてくる！」

セナ「（うん、気をつけてね！）」

レンはセナだけにいうと、攻撃が放たれた場所に走った

なのは「レン君！？」

アリサ「ちょっと、レン！？」

すずか「危ないよ！」

3人に呼びかけられても、レンは気にせず走っていった

リュウセイとフィリアの家・・・

リュウセイ「・・・ん？」

フィリア「どうしたの？」

リュウセイ「セナからだ・・・」

セナ「（リュウ君！多分、ショッカーだと思っただけ・・・）」

リュウセイ「（多分？）」

セナ「（うん。遠くからアリサちゃんを狙ってきて・・・）」

リュウセイ「（アリサが!?)」

セナ「（うん。とっさにレン君が避けるようにいったから大丈夫だったんだけど・・・）」

リュウセイ「（そうか・・・で、レンは?)」

セナ「（なんか誰かがいた気がするからって・・・）」

リュウセイ「フィリア、レンがいった場所を検索してくれ」

フィリア「うん」

リュウセイ「（わかった。今から急いで向かう！それまでなのは達をたのむ!）」

セナ「（わかった!）」

リュウセイ「フィリア、行くぞ!」

フィリア「オッケー。レンがいったところ大体検索して分かったよ」

リュウセイ「サンキュー!」

リュウセイとフィリアは急いでレンの所へ向かった

その頃レンは・・・

レン「おい!そこにいるんだろ!？」

「よく分かったな・・・仮面ライダーナイト・・・いや、秋川レン」

レン「シヨツカーの1人だな？」

「ああそうだ。俺の名はダークデイケイド・・・」

レン「なぜアリサを狙った!？」

D^{ダーク}デイケイド「お前らの身の回りの奴を殺したらどうなるかと思っ
たからだ。まあ、結局は失敗したがな」

レン「貴様・・・!!」

アリサ「レン!」

「すず・なの「レン君!」

レン「アリサ、すずか、なのは!?!」

Dディケイド「まさか自分たちから来るなんてな……」

レン「逃げる!はやく!」

なの「で、でも……」

Dディケイド「まずはお前からだ」

レン「すずか!」

Dディケイドはすずかに手を伸ばす。しかし……

『ちよ〜つとまったく!』

何かがどこからともなく飛んできてDディケイド手に体当たりをする

Dディケイド「く……邪魔だ、どけ」

『退くわけないだろう!』

「キバット!」

キバット『やっと来たかソウマ!』

ソウマ「遅くなってゴメン、すずかちゃん。……キバット、行く

よ！」

キバット『よっしゃー！キバっていくぜ！ガブツ！』

ソウマ「変身！」

その時、龍騎とファムもやってきた

ファム「あなた達ははやく逃げて」

龍騎「高町なのは、君にはやることがあるんじゃないか？」

なのは「あ……はい！」

なのはは走り出した

レン「セナ、アリサ、すずか。後を追うぞ」

セナ「うん」

アリサ「わかった。すずか、いくよ」

すずか「ソウマ君……」

キバ「ここは任せて！はやくあの子のもとに……」

すずか「……うん、わかった」

レン、セナ、アリサ、すずかはなのはの後を追った

龍騎「覚悟しろ！」

Dデイケイド「お前らの相手はこいつらだ」

Dデイケイドは灰色のオーロラを出した。その中から、ホースファ
ンガイア、シザース、タイガが出てきた

Dデイケイド「後は頼むぞ」

Dデイケイドは灰色のオーロラに包まれ、その場から姿を消した

ファム「やろう、龍騎」

龍騎「ああ！」

そのころ、なのは達……

アリサ「なのはは！」

すずか「どうしたの？……あれ？その子は……」

セナ「フェレットだね。でも、何でこんなに傷だらけに……？」

アリサ「きつとさっきの黒い奴Dデイケイドのせいよ！」

すずか「お、落ち着いて！」

なのは「まさか、この子が……？」

なのはフェレットをみながら、そう思っていた

リュウセイ「だな。まあとにかく、次回は俺とフィリアとソウマの戦いと」

フィリア「なのはが魔法少女になる話だよ！」

リュウ・フィリ「次回もお楽しみに！」

第12話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 前編』（前書き）

遅くなつてすいません！本当にすいません！こんな作者ですが、これからもよろしくお願いします！

ダブルとオーズの映画が始まりましたね！みたひとつていますか？俺は多分冬休みに見に行くと思います。ちょー楽しみwwww

作

「ごめんなさい、遅くなつてホントにごめんなさい！」

リュウセイ

「今回は……大目に見るか？」

フィリア

「ん……そうだね」

レン

「まあ、パソコンがぶっ壊れてたからな」

セナ

「しょうがないもんね」

作

「ごめんなさいごめんなさい」

リュウセイ

「きいてる……？」

フィリア

「きいて・・・ないね」

作

「ごめんなさあああああーい！」

セナ

「モモタロスになってる」

レン

「叩いたらなおるか・・・？」

作

「いや、俺テレビじゃねーし」

リュウセイ・フィリア・レン・セナ

「あ、元に戻った」

なのは

「第12話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 前編』始まるよ！・・・作者さん、ちよつとお話しようか・・・」

作

「ぎゃあああああー！」

第12話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 前編』

……ファム・シザース……

ファム

「はあ！」

シザース

「く……おらあ！」

ファム

「うわあ!?!」

シザース

「女なのになかなかやるな」

ファム

「女だと思って舐めてたら、痛い目にあうよ?……はっ！」

シザース

「おっと。……俺も舐められちゃ困るなあ」

<ストライクベント>

シザース

「はっ！」

ファム

「ぐあ!く……!」

<ソードベント>

ファム

「たあ！」

シザース

「ぐ……！だったら……このカードだ！」

<アドベント>

ファム

「奇遇だね、私も使つところだったんだ」

<アドベント>

契約モンスターは、モンスター同士戦い始めた

ファム

「はあ！たあ！」

シザース

「ぐああ！」

ファム

「はやく終わらせたいから、これで決めるね」

シザース

「俺もだ」

<<ファイナルベント>>

シザース

「はあああ！」

ファム

「たああああ！」

ドオオオン！

2つの必殺技がぶつかり合う。煙が舞う中、1つの人影が見えた。やがて煙は晴れ、そこに立っていたのは……

ファム

「ふう……終わった終わった……なのは、ユーノと無事にあえたかな？」

フィリアの変身するファムであった

……龍騎・タイガ……

ファムとシザースが戦っている頃……

龍騎

「つらああああ！」

タイガ

「はっ！」

龍騎

「ぐあ！？」

タイガ

「なかなかやるね、君。子供にしては」

龍騎

「良く子供ってわかったな」

タイガ

「鳴滝から聞いていたからね」

龍騎

「ああそうかよ！はあ！」

タイガ

「ぐ……不意打ちか……結構卑怯？君」

龍騎

「勝負に卑怯もラッキョもねえ！」

といいながら殴りかかる龍騎。……てか、それシザースの言葉だし

タイガ

「確かに勝負だからね……だったらこれを使わせてもらおうよ」

<フリーズベント>

龍騎

「！！足下が……！」

タイガ

「卑怯もラッキョも無いんだよね？」

<ストライクベント>

タイガ

「はあああ!」

龍騎

「うわあああ!?!この野郎!」

<ストライクベント>

龍騎

「はあああ!」

タイガ

「ぐあああ!?!」

龍騎

「まだまだ!」

<ソードベント>

龍騎

「でやあああ!」

タイガ

「ぐう・・・!」

龍騎

「これで決める!」

<ファイナルベント>

龍騎

「はあああああ！」

タイガ

「ぐああああ！」

龍騎

「つしゃあ！終わった！」

……キバ・ホースファンガイア……
ファムや龍騎が戦っている頃……

キバ

「はっ！」

^{ホース}

Hファンガイア

「おらあ！」

キバ

「ぐっ……！」

キバツト

『どっつする？ソウマ』

キバ

「ガルルでいく……！」

キバツト
『よっしや〜!』

キバは青色のフェッスルをキバツトにふかせた

キバツト

『ガルルセイバー!』

キバは、キバガルルホームに（以後キバG）なり、ガルルセイバーでHファンガイアを切る

キバG

「はあ!」

Hファンガイア

「ぐあ!?!」

キバツト

『案外たいしたことねえな』

キバG

「うん・・・」

Hファンガイア

「ふざけんなああ!」

キバG

「!?!?ぐあああ!?!」

キバGは突然のことだったので反応が遅れてしまい、Hファンガイ

アの攻撃をくらってしまっ

キバツト

『大丈夫か!?!』

キバG

「うん・・・結構効いたけどね・・・」

キバツト

『どうする?次で決めるか?』

キバG

「そうする・・・早めに終わらせて、あの人達のことについて聞かないと・・・」

そう言って龍騎とファムをみる

キバツト

『そうだな。よっしゃ!いくぜソウママ!』

キバG

「ああ!」

キバツト

『ガルル・バイト!』

キバG

「はああああ!」

Hファンガイア

「ぐ……ああああ！」

キバは『ガルルハウリングスラッシュ』を決め、Hファンガイアを倒した

キバツト

『あっちもちょうど終わったみたいだぜ？』

キバG

「みたいだね……」

龍騎

「よう、終わったか？」

キバG

「あ……はい」

ファム

「まあ、話す前に変身解こうよ。リュウセイ」

龍騎

「そうだな」

龍騎、ファム、キバは変身を解く。その時、

レン

「（リュウセイ！変身を解くな！）」

リュウセイ

「（え？いや、もう解いたんだけ……）」

すずか

「リュウセイ君にフィリアちゃん・・・？」

リュウ・フィリ

「・・・え？」

2人が振り向くと、そこにはレン達と一緒に逃げたはずのすずか
いた・・・

リュウセイ達が戦っているとき、フェレットを見つけたレン達・・・

レン

「で？どうするんだなのは」

なのは

「どうするって・・・」

アリサ

「とりあえず、病院・・・？」

セナ

「獣医さんだよ！」

なのは

「ええと・・・この近くに獣医さんってあったっけ・・・？」

アリサ

「ううんえっと、この近くだと確か・・・」

レン

(それにしても、リュウセイ達大丈夫か・・・?)

セナ

「・・・あれ？」

レン

「どうした？セナ」

セナ

「すずかちゃんがないんだけど・・・」

レン

「はあ!？」

慌てて周りを見渡すレン

レン

「何処に行ったんだ・・・?・・・まさか!」

セナ

「心当たり有るの？」

レン

「ああ。俺達が逃げるとき、誰か来ただろ？」

セナ

「うん。確か・・・ソウマ君・・・だったっけ？」

レン

「さすがが名前をいってたんだ。知り合いなんだと思う」

セナ

「じゃあ・・・まさか、リュウ君達の所に・・・!」

レン

「正確には、ソウマって奴だと思っが・・・多分そうだろう」

セナ

「やばくない?」

レン

「リュウセイに連絡する!」

セナ「間に合ったら良いんだけど・・・」

レン

「(リュウセイ!変身を解くな!)」

リュウセイ

「(え?いや、もう解いたんだけ・・・)」

レン

「・・・セナ」

セナ

「?」

レン

「なのはとアリサを頼んだ」

と言って走ってきた道を引き返した

セナ

「え？あ・・・ちよつと！」

なのは

「どうしたの？」

アリサ

「って、レンは？すずかは？」

セナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのは

「おい」

セナ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリサ

「セナ？」

セナ

(どろどろ) あー！

なのは

「セナちゃん？」

アリサ

「何かいいなさいよ!」

セナ

「理由聞いてる暇があったら、フェレットを獣医さんに連れて行く」
うね?」

なのは・アリサ

「あ……………」

リュウセイ

「何でお前がいるんだ?」

すずか

「え?だって、ソウマ君が気になったから……………」

フィリア

「ねえ、まさかとは思っけど……………今のみてた……………?」

すずか

「……………うん。ごめんね?みるつもりはなかったんだけど……………」

リュウセイ

「あゝ、まあみられたらしゃーないよな……………」

フィリア

「だね……………」

ソウマ

「すずかちゃん、大丈夫だった？」

すずか

「それはこっちの台詞だよ？ソウマ君。ソウマ君こそ怪我してないの？」

ソウマ

「まあ……」

すずか

「ホントに？」

ソウマ

「本当だって！」

フィリア

「さて、イチャついてる所悪いんだけど……」

ソウマ

「／／／イチャついてません！／／／」

リュウセイ

「周りからみたらそう見えちゃうから」

すずか

「／／／／／」

フィリア

「自己紹介がまだだったね。私は……」

レン

「リュウセイ！フィリア！」

リュウセイ

「あ、レン」

レン

「結局ばれたのか？」

フィリア

「まあ・・・」

リュウセイ

「すずかもライダーと知り合いらしいし、別に問題ないだろ」

レン

「・・・相変わらずだな。そのバカっぷり」

リュウセイ

「んだと!?!」

追いかけてつこを始める2人

フィリア

「あつと、あの2人は気にしなくて良いから。私はフィリア。仮面ライダーファムでもある」

といいながらカードデッキを見せる

ソウマ

「僕は紅ソウマ。仮面ライダーキバです。それでこっちは……」

キバット

『俺様はキバットバット三世！キバットって呼んでくれ！』

フィリア

「よろしくソウマとキバット」

すずか

「ねえ、あの2人はどうするの？」

フィリア

「一応紹介しとくか……えっと、今追いかけてる方が、辰巳リュウセイ。私の彼氏」

ソウマ

「あ、付き合ってるんだ」

フィリア

「まあね。それで、追っかけられてる方が秋川レン。私の幼馴染み」

リュウセイ

「まちやがれー！」

レン

「待てといわれて待つ奴がいるかー！」

フィリア

「……まあ、私の家でちょこつと話そうか。もちろんすずかもね」

すずか

「なのはちゃんとアリサちゃんは？」

フィリア

「……あんまり知られたくないから……」

すずか

「……わかった」

フィリア

「おい、そのバカー」

リュウセイ

「ああ!？」

フィリア

「レンを解放してあげてねー。んでもって家に帰るよー」

リュウセイ

「はいはい」

レン

「はあ、はあ、はあ、じゃあ俺は戻るな」

リュウセイ

「はあはあ、わかった。じゃあまた後で」

セナ

「あ、戻ってきた」

レン

「ん？お前だけ残ってたのか？」

セナ

「うん。なのはちゃんとアリサちゃんはもう先に行ったから」

レン

「分かった。ならいそごう」

セナ

「うん！」

あれから時間がたち、リュウセイ達もライダーのことについて説明が終わり、今は夜

・・・なのは・・・

「アリサちゃん、すずかちゃん、あの子はうちで預かれることになりました。明日、学校帰りに一緒に向かえに行こうね　　なのは」

なのは

「送信つと！」

でも、よかったなあ。預かれるようになって。でも、飼い主さんってだれなんだろう？

なのは

「さて・・・と、早く寝よう・・・っ！」

今の……とりあえず、集中して……

「聞こえますか？僕の声が、聞こえますか！」

なのは

「あ……。昨夜の夢と、昼間の声と同じ声……」

「（聞いてください。僕の声が聞こえる貴女、お願いです！僕に少しだけ、力を貸してください！）」

あの子が……しゃべってるの……？

「（お願い！僕のところへ……！……！……！）」

最後の方の音が……私はベッドに倒れ込んだ

なのは

「……ん」

（お願い……届いて……）

……リュウセイ……

こんばんは、リュウセイです。はあ、早速すずかにばれちゃったよ……なのは達には黙ってるっていつてくれたからよかったけど……え？どうでもいいから話進める？了解

フィリア

「ちよつとリュウセイ、聞いてるの?」

リュウセイ

「ん?ああ、聞いてる聞いてる」

レン

「それで、どうするんだ?早くしないとなのはがユーノのところに
いつちまっぞ?」

セナ

「やっぱり、昼間はリュウ君とフィリアが行ったから、私とレン君
かな?」

もう分かりますよね?はいそうです。魔法少女になる日が今日の夜
つてことでだれが行くか決めてる最中でーす

神

「(リュウセイ!フィリア!使い魔みたいなものできだぞ!)」

リュウセイ

「(マジか?)」

フィリア

「(早いね)」

神

「(とにかく、後で取りに来てくれ!そんじゃ!)」

バカのくせに早いなあ・・・そんじゃこっちも早く解決しよう

リュウセイ

「どうするんだ？」

レン

「俺とセナがいく。ってことで、お前らは待機でいいか？」

セナ

「オツケ」

リュウセイ

「りょうかーい」

フィリア

「ふああ・・・」

リュウセイ

「・・・フィリア？」

フィリア

「にやんでしょうか？」

セナ

「フィリア、言えてないよ。噛んじゃってる」

リュウセイ

「・・・で、聞いてたよな？」

フィリア

「大体ね」

レン

「大体かよ」

フィリア

「とにかく、早くしないと・・・もう向かってるかもよっ」

セナ

「そうだね。じゃあいつてくる」

レン

「何かあったらよろしくな」

リュウセイ

「おう！」

フィリア

「任せといて！」

さて、神のどこに行くか

・・・第3者視点・・・

リュウセイ達が話しているころ、夜中の道路・・・人の姿はほとんどみられない。その道を走っているなのは

なのは

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

向かっている先は、フェレットを預けた動物病院

なのは

(あともう少し……!)

なのはは、榎原動物病院の前で立ち止まる

なのは

「はぁ……はぁ……」

動物病院に入ろうとすると……

キィィ……!

なのはは耳を塞ぐ

なのは

「っ!……うう……またこの音……!」

辺りに風が吹く。そして、辺りが風の音だけになる

なのは

「っ……!」

なのはは顔をあげ、辺りを見渡した

「……っ!」

ドゴーン!

フェレットは、何者かからの攻撃を避ける。そしてあいている窓から外に飛び出した。その後を追っていく黒い怪物……

なのは

(急がなくちゃ……!)

病院の中に入ろうとするなのは。しかし、少し離れたところを走っていくフェレットの姿……

なのは

「あ!あれは……!」

そういつた瞬間、フェレットが木の上ののり、後ろの黒い怪物は木にぶつかった。そしてその木は折れ、木にのっていたフェレットは下に落ちてしまう

なのは

「ああ!」

フェレット……ユーノはなのはを見ると、なのはにむかって飛び込む

なのは

「うわ!……な、なにになに!?!一体なに……!?!」

ユーノ

「……きて、くれたの?」

なのは

「え．．．？．．．しゃ、しゃべった!？」

なのはは驚いてフェレットを落としそうになるが、慌てて支えたため落ちはしなかった。ほっ．．．と安心するなのは。しかし怪物は、起き上がりなのはのほうをむく

「ぐおおおおお!!」

なのは

「あれ．．．なんなの．．．!？」

ユーノ

「逃げて!はやく!」

その時、

オルフェノク

「貴様ら、何をしている．．．?」

なのは

「!あ．．．あなたは．．．?」

オルフェノク

「今から死ぬ者に答える必要はない」

オルフェノクはなのはに剣を向けるそして振り下ろす!

なのは

(助けて．．．!)

だが・・・振り下ろされた剣がなのはにあたることはなかった。なぜなら・・・

ストライクベント

オルフェノク

「ぐお!?ぐ・・・誰だ!?!」

「どうして無差別に殺そうとするかなあ、あんた達は」

なのは

「どこにいるの・・・?」

「ここだよ!」

なのはは声のしたほうを見る

なのは

「え・・・ええええええ!?!」

なのはは絶叫。なぜなら、声がしたのは上、つまり・・・飛んでいるということ

なのは

「と・・・飛んでる!?!」

「そんなに驚かなくていいじゃん　なのはちゃん」

なのは

「えっと……誰……?」

「私だよ? ……あ、バリアジャケット B」だからわかりずらいかな?」

そういつてなのは前におり、B」を解除する

なのは

「せ、セナちゃん!?!」

セナ

「せいかい ブラッカーセットアップ!」

ブラッカー

【セットアップ】

オルフェノク

「貴様……! 邪魔をするなら貴様も殺すぞ!」

セナ

「殺されるのは……」

セナ・レン

「どっちかな? / だ?」

オルフェノク

「なに!?!」

レン

「はっ!」

オルフェノク

「ぐあ!?!」

セナ

「あと・・・お前もね!ダークシュート!」

「ぐおおお!?!」

レン

「無事か?なのは」

なのは

「れ・・・レン君!?!」

レン

「よくわかったな」

セナ

「だよ。私のことはわからなかったのに」

なのは

「え・・・さっきのって何!?!あとあの怪物は!?!あの力なに!?!
なんであんな力もってるの!?!」

レン

「お、落ち着けなのは!一気に質問すんな!」

セナ

「ひざに乗っけてるフェレット落ちそうだよ!?!」

なのは

「え……？」

ユーノ

「お、落ちる……！」

なのは

「あ、ごめん！」

オルフェノク

「ふざけやがって……！」

レン

「ふざけていないな」

「ごああああ！」

セナ

「さて……フェレット君、君はなのはちゃんに魔法を教えてあげてね」

ユーノ

「は、はい」

なのは

「え……？魔法？」

最後の最後までわけがわからないのはであった……

第12話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 前編』（後書き）

作

「にゃいさー！」

リュウセイ

「バカはほっときましょう」

フィリア

「さんせーい」

セナ

「ええっと、これから後書きを質問コーナーにしようかと思っていますらしいです」

レン

「質問がある人は、メッセージにお願いします！」

リュウセイ

「一人何回してもいいですよー！」

フィリア

「ただし、作者が答えられる範囲でお答えします！」

作

「にゃーっ」

リュウセイ

「次回は、第13話！」

フィリア

「『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 後編』！」

セナ

「お楽しみに〜！」

レン

「かなり遅くなるかもしれないから、注意してください！」

リュウセイ・フィリア・レン・セナ

「質問、お待ちしています！」

作

「扱い酷い！」

リュウセイ・レン

「黙っとけ」

作

「ぎゃああああっすー！」

第13話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 後編』（前書き）

作

「みくらいよ！」

レン

「何が？」

作

「オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダーだよ！」

セナ

「略して？」

作

「オでオレか！」（オ オーズで 電王 オ オールライダー

レッツゴー か 仮面ライダー

レン

「わかるかああ！？」

セナ

「略しすぎ！レッツゴー仮面ライダーで良いと思う！普通にそれで良いと思うよ！？」

作

「やっぱり？実はオでオレかっていいらなかったんだよね」

レン・セナ

「じゃあ何故言っただし!？」

作

「思いついたから」

なのは

「・・・第13話『魔王し……魔砲少女高町なのは! 後編』始まるよ!」

第13話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 後編』

第三者視点

なのは

「ね、ねえ、魔法って何のこと？」

ユ一ノ

「さつき、あの二人が使ってたでしょ？あれが魔法の力なんだ」

なのは

「じゃあ、私もあれを使うの？」

オルフェノク

「・・・はあ。別にやりたくないならやらなくていいんじゃないか？」

なのは

「え・・・？」

オルフェノク

「お前はあの力が怖いんだろ？俺たちと互角、もしくはそれ以上の力をもつあいつらだって怖いだろ？」

なのは

「そ、そんなこと・・・」

オルフェノク

「そんなことないってか？それはどうだろうな。俺が化け物だからいえるが、化け物と同じようなもんだぜ？あの力は」

なのは

「……………」

レン

「なのは！そいつの言葉を真に受けるな！」

レンがオルフェノクにダークバイザーで斬りかかる。

オルフェノク

「おっと！」

オルフェノクは自分の剣でそれを防ぐ。

レン

「なのは、お前が俺たちを怖がるのは構わない。だけど、こいつだけは信じるな。何があっても絶対にな！」

セナ

「レン君の言う通りだよ、なのはちゃん。魔法の力が怖くても、あいつらを倒したいと思うなら、勇気を出して魔法の力を手にしてみなよ」

なのは

「レン君、セナちゃん……」

レン

「後はお前次第だぞ、なのは」

セナ

「もう一回聞くよ？なのはちゃん。なのはちゃんはあいつを倒した
い？」

なのは

「・・・倒したい。みんなを傷つけるなら！」

セナ

「これから危険な目にあうかもしれないよ？それでもいいんだね？」

なのは

「それでも！みんなを守れるなら！」

セナ

「なのはちゃんらしいね・・・。じゃあそこで俯いてるフヘレット
君」

ユーノ

「なんですか？」

セナ

「頼むよ？なのはちゃん、覚悟ができたみたいだから」

ユーノ

「・・・わかりました」

セナ

「じゃあ私はあいつらを止めてるから！」

そういつてレンの元に走っていくセナ。ユーノは、なのはにもう一度きいた。

ユーノ

「・・・本当にいいんですか？」

なのは

「うん。みんなを守れるならいいよ。危険だとしても、私はやるよ。あんなのがいるんなら、レン君とセナちゃんにだけ任せられないよ。もう戦ってるって知ったんだから。放っておけないよ」

ユーノはもう一度俯いてから、なのはの目をみた。

ユーノ

「わかりました。じゃあ、これを持って、今から僕の言うことを繰り返して」

なのは

「わかった」

ユーノ

「いくよ・・・我、指名を受けし者なり」

なのは

「我、使命を受けし者なり」

ユーノ

「契約の元、その力を解き放て」

なのは

「契約の元、その力を解き放て」

ユーノ

「風は空に、星は天に」

なのは

「風は空に、星は天に」

ユーノ

「そして、不屈の心は」

なのは

「そして、不屈の心は」

ユーノ・なのは

「この胸に！」

ユーノ・なのは

「この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ！」

レイジングハート
RH【スタンバイレディ、セットアップ】

レン

光の柱ってことは、成功したんだな

オルフェノク

「余所見をするな！」

レン

「あぶね！」

ウイング

【マスター、はやく終わらせましょう】

レン

「そうだな……。リュウセイとフィリアに話さないといけない」ともあるしな」

・
本当はばらすつもりはなかったが、予想外なことだったからなあ・

ウイング

【マスター？】

レン

「ああ、ごめんごめん。考え事してた」

オルフェノク

「こないならこっちからいくぞ！」

とかいいながら斬りかかってくるオルフェノク。向かってくるのはいいんだけど……

レン

「よつと」

……簡単に避けられるんだよな

オルフェノク

「ちっ……！」

はあ……。何回も同じ行動してたら……

ウイング

【時空転移】

オルフェノク

「な！？消えた……。！？」

嫌でも行動パターンが……

レン

「わかるっつーの」

俺はオルフェノクの後ろから斬りかかる

オルフェノク

「しまっ……。！？」

今更気づいても遅いな

レン

「いくぜ、ウイング！」

ウイング

【了解、マスター】

レン

「じゃあな！オルフェノク！」

レン・ウイング

「【ダークネス・スラッシュ！】」

オルフェノク

「ぐああああー！！」

レン

「よし、おわりっ」と

セナ

「ぐおおおおおー！！」

セナ

「うるさいなあ……」

なのはは成功したし、あとはこっちに来るのを待てばいいのかな？

セナ

「さて、そろそろ反撃しますか！」

あれって初めてだけど、威力ってどのくらいかなあ……

セナ

「……手加減できないかも……。ま、いつか！いくよブラッカ
ー！！」

ブラッカー

【了解です、マスター】

セナ

「ちょこーっとビリッと来るかもね!」

ブラッকার

【ライボルト】

セナ

「はあああ!」

「ぐおおお!?!」

なのは

「セナちゃん!」

セナ

「なのはちゃん! やつときた・・・」

なのは

「じゅめんね。・・・それで、どじすねばいいの?」

第三者

セナ

「どじするって・・・封印?」

なのは

「なんで疑問系なの・・・?」

セナ

「だってさー・・・って、」

ブラッカード

【プロテクション】

セナ

「フェレットー。説明よろしくー！」

そう言うってなのは後ろの方に飛んでいくセナ。

なのは

「ちよつとー！……はあ……。えと、どうすればいいの？」

ユーノ

「あれを、封印しないといけないんです」

なのは

「どうやって？」

ユーノ

「心を済ませて。心の中に、貴方の呪文が浮かぶはずですよ」

「グオオオオオオオ！」

なのは

「心を……済ませて……」

そう言うって目を閉じるなのは。

セナ

「原作通り、っと」

レン

「よう。順調か？」

セナ

「レン君。もう終わったの？」

レン

「ああ。今までの奴に比べれば弱かった」

セナ

「あはは……。その方がありがたいけどね……」

レン

「後は封印を待つただけだが……。リユウセイ達にはどう説明する？」

セナ

「……。忘れてた」

レン

「でもまあ、『なのはがオルフェノクに襲われてたからついばらした』って言えば大丈夫だろ……。特にリユウセイは。単純だからなあ、あいつ……」

セナ

「相変わらずだね……。否定出来ないけど……」

なのは

「……………」

目を閉じ、心を済ませるなのは。その時……

「ぐおおおおおお！」

さっきプロテクションに弾かれた怪物が、なのはに向かい、攻撃をしてきた。なのはは目を開き、RHを前に向ける。

RH

【プロテクション】

プロテクションで攻撃を防ぎ……

なのは

「リリカル、マジカル！」

ユーノ

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

なのは

「ジュエルシード、封印！」

RH

【シーリングモード、セットアップ】

光のリボンが、相手を包み込み……

R H

【スタンデバイレディ】

なのは

「リリカル、マジカル。ジュエルシードシリアル21、封印！」

R H

【シーリング】

「ぐおおおお！」

無事封印を完了した。

セナ

「お疲れ様、なのはちゃん」

レン

「よく頑張ったな」

なのは

「セナちゃん！レン君！」

セナ

「はい、これ」

なのは

「これ・・・なに？」

ユ一ノ

「それは、ジュエルシードです」

レン

「レイジングハート……だったか？それで触れてみる」

なのは

「ふう……？」

RHで触れ、ジュエルシールドはRHの中に消えていった

なのは

「えっと……これで、終わりなの？」

そう言ってなのはは元の服装に戻る。

セナ

「そうだよ。今回はこれで終わり」

セナとレンも元の服装に戻る。

ユーノ

「あなた達のおかげで、終わりました……ありがとうございます」

そう言って倒れるユーノ。

なのは

「だ、大丈夫!？」

セナ

「（取り合えずオルフェノクが着たことを除けば原作通りだね）」

レン

「(だな。あとは、家に帰ってリュウセイ達に説明しないとな)」

セナ

「(めんどうかい・・・)」

レン

「(なのはが怪我するよりはマシだろ)」

セナ

「(・・・だね)」

レン

「さて、なのは。帰るぞ、送ってく」

なのは

「あ、うん。此处に居たら大変あれだから・・・」

セナ

「派手にやったもんね。・・・レン君もだよ？」

レン

「・・・悪かったな」

セナ

「仕方ないけどね」

レン

「なげ言っつな。とにかく・・・帰るぞ」

そう言ってまたセットアップする。

なのは

「れ、レン君？」

セナ

「大体分かったけど、いいの？」

レン

「んなことどうだって良いだろ」

セナに適当に返事をしながらなのはとセナを抱える。

なのは

「……へ？」

レン

「フェレット落とすなよ。あと、しっかり掴まってる」

なのは

「え？あ、うん」

その後、なのはを家に送った。力のことを色々と聞かれたが、セナがもう遅いから明日と言って、何とか説得し、家に帰った。

第13話『魔王し……魔砲少女高町なのは！ 後編』（後書き）

・・・もうグダグダですねー。ははは。・・・バカだ！笑い飛ばそうとしたけど逆に悲しくなってきた・・・！

〈質問コーナー〉

作

「では始めましょう！」

フィリア

「質問1！木下聖羅さんからです」

Q・小説のよい書き方は？

作

「思ったこと、つてか考えたこと書いてるだけですからねえ・・・。特には・・・。ただ、気をつけてるのは、「！」「とか「？」とかを何処に付けるか考えて付けてはいますね。全然上手くないんですけど・・・。でも、ありがとうございます。元気がでますよ、そう言っていただけと」

リュウセイ

「質問2！同じく木下聖羅さんからです」

Q・好きな仮面ライダーは？（昭和だけ）

作

「あんまり知らないからなあ・・・んー・・・。知ってる中でいったら、ブラックとブラックRXですかね。・・・仕方がないんです、知ってる数が少ないんです・・・。」

レン

「質問3。同じく木下聖羅さんから」

Q・スマブラなどで、好きなキャラは？

作

「フォックスです！かわいいしかっこいいし！何より使いやすい！他にはピットにゼルダ、ソニックですかね。・・・一応この4人は使い手です。・・・ああ、フォックスを触りたい・・・！」

なのは

「戻ってきてねー、作者さん」

セナ

「最後の質問です！同じく木下聖羅さんから！」

Q・ポケモンで好きな、ポケモンは？

作

「そうですね……。ルカリオとリオルですね！ルカリオはかっこよくて、リオルはかわいいので！他には、イーブイの全進化ですね。かわいいです」

リュウセイ

「全部同じ作者さんじゃないかよ」

作

「いいの。何個でもい言っつていったんだから」

フィリア

「作者から、メッセージだけじゃなくて感想覧でもオツケーとのことです」

セナ

「次回は私達が戦っている間のフィリア達の話だよ！それじゃあ、みんなでいくよー！せーの！」

全

「戦わなければ、生き残れない！」

第14話『ようこそTノ神の言つことは突然すぎる』（前書き）

作

「やっとこさ更新だー！」

リュウセイ

「よく頑張ったなー。部活辛くて死にそうだったのに」

作

「ふふふ・・・あとバトンも書かないとな」

フィリア

「なぜもらったし」

作

「どうしてもやりたかったんだ！」

セナ

「今回は使い魔も含めて4人オリキャラがでるよ」

レン

「ある意味特別ゲストもな」

フィリア

「あー、あれはないわー」

リュウセイ

「お休みと言ってからすぐに夢の中状態の作者曰く、『何か思い切
ってネタに走ってみよう。眠くて滅茶苦茶になったのは私の責任だ。』

だが私は謝らない』だって」

レン

「まあ、前回とかなり雰囲気が違うからな」

セナ

「ギャグだもんね」

なのは

「それでは、第14話『ようこそTノ神の言うことは突然すぎる』、始まるよー!」

第14話『ようこそTノ神の言っことは突然すぎる』

第三者

セナとレンが向かった後・・・

リュウセイ

「そういえばさ、神の奴、送るって言ってなかったけ？」

フィリア

「あ、そう言えばそうだね。・・・ま、いいじゃん」

リュウセイ

「だな。・・・今更だが」

フィリア

「ん？」

リュウセイ

「どうやって神の所に行けば良いんだ？」

フィリア

「・・・呼べばいいんじゃない？」

リュウセイ

「忘れてたな、その方法」

フィリア

「かーみさーまよー」

すると何故かモニターが出てきて……。そこにうつっているのは、背中から黒い翼、薄紫の服をきて、先の方が十字架のようになっている杖を持っている男性とにか話している神だった。

神

『今手が離せんからリュウセイの部屋に向かってくれー。魔法陣があるからー。こっちについたら渡が案内役としているからよろしくー』

？

『おいこら。きいてんのか』

神

『うるさいぞ。今話してる最中だ』

フィリア

「……なんかすいません」

？

『君が気にすることじゃないさ。なるべく早くなー』

そういつてモニターが消える。

リュウセイ

「誰だったんだろうな」

フィリア

「まあいいからいーじつや」

リュウセイ

「そうだな」

リュウセイの部屋

リュウセイとフィリアは、部屋に到着し、ドアを開けて啞然としていた。

リュウセイ

「・・・でけえなおい」

フィリア

「こんなでかい魔法陣だとは・・・」

リュウセイ

「・・・ま、まあ、早く行こうか」

そういつて魔法陣の上にいるリュウセイ。

フィリア

「あ、まってよ」

慌ててフィリアも魔法陣の上に乗る。すると、魔法陣は光だし・・・光が消えたときには2人はいなかった。

天界

無事到着した2人。

リュウセイ

「えっと、渡さんいるって言ってたよな」

フィリア

「……あ、あれって渡さんじゃない」

渡

「すみません。色々やってたら遅くなってしまって……」

リュウセイ

「気にしてないですよ」

渡

「そう言っていたけるとありがたいです」

キバツト

「あいつなかなか離れなかったもんね」

渡

「黙っててもらえますか、キバツト」

フィリア

(あいつ……?)

渡

「まあいいです。行きましょう」

リュウ・フィリ

「あ、はい」

キバツト

「相変わらず息びったりだなー」

フィリア

「幼馴染みだからね」

キバツト

「恋人だからじゃなくてか？」

フィリア

「キバツト！」

リュウセイ

「あの、渡さん。キバツトの言ってたあいつって誰ですか？」

渡

「んー・・・簡単に言うと、僕が預かってる子、かな」

リュウセイ

「そうなんですか」

キバツト

「かなり懐いてるんだぜ、渡に」

渡

「なんでいつも余計なことというの、キバツト」

フィリア

「渡さん、優しいですからね」

リュウセイ

「俺もそう思う。ライダーについて色々と教えてくれたり、特訓の

相手になつてくれたり・・・」

フィリア

「一回も勝てなかったけどね」

リュウセイ

「強かった。最初から勝てる気しなかったもんなー」

渡

「そこまで強くないよ」

2人の会話を聞きながら苦笑いをする渡。その時、

カチ

リュウセイ

「・・・？」

フィリア

「カチ・・・？」

渡

「・・・っ！」

突然リュウセイとフィリアを抱え、後方に飛ぶ。その瞬間

ビュン

目の前を巨大な鎌が通り過ぎていった。

リュウ・フィリ
「……………え？」

渡

「またですか……………」

リュウセイ

「い、今の何ですか渡さん!？」

渡

「簡単に言うと、防犯システム……………かな。簡単に神達の所にいけないようについてるんだけど……………。あの馬鹿神、また解除し忘れたのか……………」

キバツト

「(渡の奴、神に対しては厳しい口調になるから……………)」

リュウセイ

「(あー、分かる気がする)」

フィリア

「(私達もだからね……………)」

渡

「申し訳ないんだけど、変身かセットアップしてくれますか?一気に抜けるんで……………」

リュウセイ

「わかりました。ドラグ、セットアップ」

ドラゲ

【セットアップ】

リュウセイ

「ごめんフィリア、抱えた方がはやいから」

そう言ってお姫様だっこするリュウセイ。

フィリア

「恥ずかしいんだけど・・・／＼／」

リュウセイ

「こっちの方がはやいからさー」

渡

「キバット!」

キバット

「カブリ!」

渡

「変身」

変身直後に青いフェッスルをとりだす

キバット

「ガルル・セイバー!」

キバG

「行きますよ」

リュウセイ

「はい！」

防犯（渡曰く）システムを強行突破で進む。

リュウセイ

「ドラグ、頼むぞ！」

ドラグ

【イエス、マスター】

フィリア

「スワンもサポートよろしくね」

スワン

【了解です】

キバG

「まったく・・・あの馬鹿神・・・」

キバツト

（渡がSモードになったー！）

何回か巨大な鎌が目の前を通り過ぎ、

キバG

「次は魔力弾が飛んでくるから、気をつけて！」

キバツト

「バツシャー・マグナム！」

リュウセイ

「ここ天界ですよね！？物騒なもの多くないですか！？？」

キバB

「昔シヨツカーが何か知らないけど攻めてきて、それからこんな風になったんだ」

フィリア

「どんだけなの・・・」

キバB

「また鎌ですよ！」

キバツト

「ガルル・セイバー！」

リュウセイ

「なにこの交互！なんかむかつく！」

フィリア

「文句言ってもしょうがないよリュウセイ！」

リュウセイ

「俺達使い魔引き取りに来ただけだよな？」

キバG

「すいません。きちんと叱っておきますから・・・」

リュウセイ

「俺も殴ないと気が済まない」

キバG

「・・・あれで終わりですね」

リュウセイ

「巨大な鎌ばかりだったなあ・・・」

フィリア

「そうだね」

?

「嫌いじゃないわ!」

リュウ・フィリ

「って、オカマ!?!」

ツツコミながら着地するリュウセイ。フィリアを降ろしてから、

リュウセイ

「渡さん、キバット、今最後に変なのでしたよね!?!」

フィリア

「あれって、カマ違いですよね!?!」

キバット

「・・・それは気にするな!」

渡

「・・・なんか居座ってたみたいですね。気にしないで行きましょ
う」

気にするんですけど!?!などとツッコミながら渡の後を追っかけて
いった。

神の部屋

神

「遅いの」

?

「防犯システム解除し忘れたんじゃないの?」

神

「・・・あ」

?

「って、本当に忘れてたんかい!?!」

どこからかはりせんを取り出して叩く女性。

神

「し、仕方ないじゃないか!いきなりクロウに呼ばれたから慌てて
いったら忘れたんじゃない!」

クロウとは、リュウセイとフィリアが神を呼んだときに神と話して
いた男性だ。ちなみに本名はクロウ・ディーネという。

?

「言い訳しない。そんなんだからリュウセイ君やフィリアちゃん、渡さんに叩かれたりするのよ」

神

「お前も叩いとるではないか！シルフ！」

女性　シルフ・ディーネは、呆れたようにため息をつきながら、

シルフ

「問題ないでしょ、別に」

コンコン

シルフ

「あ、渡さんかな？どつぞー」

渡

「失礼します」

リュウ・フィリ

「失礼します・・・」

渡

「やっぱり防犯システム解除し忘れてたんですね、神」

神

「はっはっは。すまん」

リュウセイ

「しかも変なの居座ってるし・・・」

フィリア

「今日といつ今日は許さない」

渡

「シルフ、離れてたほうがいいよ」

シルフ

「ええ、そうするわ」

そういつて渡の隣に立つシルフ。

神

「見捨てるなー！」

リュウ・フィリ

「覚悟しろ！／＼しなさい！」

神

「ぎゃああああー！」

この騒ぎがおさまったのは、説明にきたクロウが止めるまで続いたとか……。

リュウセイ

「で？使い魔は？」

神

「……………」

フィリア

「……返事がない、ただの屍のようだ」

神

「生きてるぞー、まだ」

シルフ

「クロウ、代わりによろしく」

クロウ

「はいはい。使い魔は馬鹿が頑張って終わらせた。今は部屋で遊んでるんじゃないか？」

渡

「だから時々爆発音みたいなのが聞こえるんだ」

クロウ

「ははははは」

シルフ

「笑い飛ばさない」

神

「……誰か心配しよう」

クロウ

「……じゃあ、迎えに行こうか」

渡

「そうだね。レン君とセナちゃんが帰ってくるかもしれないから」

リュウセイ

「はい。分かりました！」

フィリア

「楽しみだなー！」

神

「結局最後の最後まで無視!？」

哀れすぎる神であった(笑)

神

「(笑)を付けるな!泣けてくるわ!」

とある部屋

クロウ

「ここなんだが……。お前ら、変身しとけ」

渡

「まだやってるんですか?模擬戦……」

クロウ

「ほどほどになっていったんだがな……」

ほどほどにと言っておいたのに、まだまだ爆発音はおさまらない。
……部屋が壊れない所は、流石天界、と言ったところか。

リュウセイ

「あの一、鏡あります?」

クロウ

「・・・すまん、近くにないわ」

シルフ

「じゃあ私が前になればいいわよね」

フィリア

「プロテクションくらいは出来ますけど・・・?」

シルフ

「大丈夫よ」

クロウ

「こいつ、これでも年に2、3回行われる大会で3位以内に入るんだ」

渡

「あれでも本気は出してないって毎回のようにつよ」

リュウセイ

「うわ・・・。すご・・・」

フィリア

「あの、今度教えてくれませんか?」

シルフ

「良いわよ。時間があるときに教えてあげる」

渡

「キバット」

キバット

「ガブリ！」

渡

「変身」

クロウ

「さて、入るか」

ガチャ

クロウが開けた瞬間・・・

ズバン！

キバット

「ドツガ・ハンマー！」

キバDはサンダーフィンガーで防ぐ。

キバD

「ねえキバット。バッシャーで防げば良かったんじゃない？・・・？」

キバット

「いちいち撃つの面倒くさいだろ？」

シルフ

「ウィンド・バリア」

クロウ

「ライム、エレナ！ストップ！」

ライム

「あ、クロウ」

エレナ

「来たんですか？」

クロウ

「ああ。えーと、こっちがリュウセイから頼まれてた使い魔のライム」

そうやって男の人の方を向く。

ライム

「よろしく！」

リュウセイ

「こっちこそ！」

クロウ

「エレナの方は、シルフよろしく。色々説明があるから」

そう言って説明しながら離れていく3人。

シルフ

「はいはい。……こっちはフィリアから頼まれた使い魔、エレンよ」

エレン

「よろしくお願いします、マスター」

フィリア

「よろしくー。普通にフィリアでいいよー」

シルフ

「じゃ、説明するよー」

キバツト

「立派になったもんだなあ、2人とも」

渡

「本当だよ。助けたときはほとんど話さなかったのに……」

キバツト

「あんな風になったのも、お前の育て方が良かったからじゃないか？」

渡

「また余計なこと言う」

キバツト

「本当のことだろうがよー」

神

「キバットの言う通りじゃよー。……いててて」

渡

「生きてたですか、馬鹿神」

神

「ひどい!？」

キバット

（ドンマイとしか言いようがない……）

渡

「冗談です。それで、何でキバットの言う通りなの?」

神

「お前がリュウセイとフィリアの心を開いたんだからな」

渡

「……僕が、ですか?あなたは何を言って……」

神

「だって、一番最初に懐いたし、渡から積極的に話しかけてるうちに心を開いたんだからな」

渡

「……そうなんですかねえ……」

神

「そっぴゃあ」

シルフ

「・・・はい、これで説明は終わり！後は帰っても良いし、自由でいいよー」

フィリア

「ありがとうございます。エレナ、いこー」

エレナ

「わかりました」

クロウ

「終わったか？」

シルフ

「ええ。丁度今」

クロウ

「じゃ、さっさと終わらせるか。まじ5000字過ぎてるから」

シルフ

「メタ発言するな」

数十分後・・・

リュウセイ

「今日はありがとうございます！」

クロウ

「喜んでもらえたなら、それでいい」

シルフ

「・・・デレたわね」

クロウ

「俺はツンデレじゃない」

フィリア

「シルフさん、また今度色々教えてください」

シルフ

「もっちろん」

神

「じゃ、後はよろしく!」

そう言って立ち去ろうとする神だが、両サイドからクロウとシルフに腕をがっちり掴まれ、

クロウ・シルフ

「これから会議だからってサボるなよ?」

神

「・・・さーせん」

渡

「じゃあ帰ろうか」

ライム

「そう言えば神、なんか言うことあんじゃなかったっけ？」

神

「あつたっけ？………あぁ！あれか」

手をポン、と叩く神。

神

「これから渡が保護者としてお主らの家に行くってことと、レンとセナとこれから一緒に暮らしてくれってことじゃ。そんじゃ、また今度！」

フィリア

「はぁ！？ちょ、いきなりなにいつて……！」

そう叫ぶがもう魔法陣の上にいるため段々と体が消えかかっている。

リュウセイ

「っの野郎……。覚えとけよおおお！」

リュウセイが最後に叫んだことは、果たして神には聞こえたのか。まあそれはともかく、まずは渡に事情を聞くことになり、レンとセナの帰りを待つことにした。

第14話『ようこそTノ神の言うことは突然すぎる』（後書き）

リュウセイ

「ちなみにクロウさんとシルフさんは一応双子、だそうですね」

フィリア

「リュウセイ、出落ちしない」

レン

「そう言えば、作者昨日？一昨日？まあいい。泣くほどの良い夢見たらしいな」

セナ

「剣崎さんと始さん達が再会する夢、だっけ？」

リュウセイ

「そうそう。作者曰く、みんな嬉しそうだったって」

フィリア

「それで朝起きたら目元濡れてたっていったよね。そして母さんに『どうしたの？』って言われてたよね」

レン

「作者は『あくびしただけ』で流したらしいけどな」

セナ

「まあそのせいで待ち合わせに遅れたらしいけど」

リュウセイ

「学校には間に合ったし、良いんじゃないか？」

フィリア

「えーっと、作者から伝言で、『これから部活で帰りが遅くなり、全部終わらせるともう10時とか9時でパソコンが出来なくなり、寝るので更新スピードがかなり遅くなります。楽しみにしてください。寝る方、感想をくださっている方、申し訳ありません。なるべく更新を出来るようにします。』・・・とのことですよ」

リュウセイ

「まあ、無理しても体壊すだけだからな」

レン

「もうすでに精神的にボロボロだけどな、こいつ」

セナ

「次回は何時になるか分かりませんが、よろしく願いします！」

第15話『説明会』（前書き）

作

「更新遅くてすみません・・・orz」

リュウセイ

「・・・さすがにもう怒るの飽きたな」

フィリア

「うん。作者だから」

セナ

「仕方ないんだもんね」

レン

「そうそう。・・・まあ、ストレス解消は神でやれば・・・」

神

「やめて！？そういうのはやめてね！？死ぬから！」

4人

「いや、神だし大丈夫だろ」

神

「orz」

渡

「それじゃあ、第15話『説明会』」

キバツト
『始まるぜ！』

第15話『説明会』

第三者

セナ・レン

「ただいまー」

フィリア

「おかえり」

リュウセイ

「遅かったな」

セナ

「いろいろとね……って、」

レン

「なんで渡さんが……?」

渡

「あー、僕がいること説明するので座ってください」

セナ

「あ、はい」

そう言って座るレンとセナ。

渡

「さて……どこから話そうか」

リュウセイ

「神に言われたことってあるんですか？」

渡

「……言っと思っ…あの馬鹿が」

リュウセイ

「ですよねえ…」

フィリア

「……なるほど」

レン

「……フィリアはなにしてんだ？」

リュウセイ

「あー、なんかはまったことがあるみたい」

フィリア

「ちよっくら部屋にこもってきていい？」

リュウセイ・渡

「駄目」

フィリア

「えー……」

渡

「今から説明するのに部屋に行ったら意味ないじゃないですか」

フィリア

「・・・でしたね」

レン

「・・・話について行けないんだが・・・」

セナ

「なんの話・・・？」

3人

「こつちの話」

渡

「じゃあ本題に入りましょうか」

「手短にな」

いつの間にかドアの前に、一人の青年が壁によっかかっていた。

渡

「・・・なんで次から次にハプニングが起こるんですか・・・」

頭を抱える渡。・・・まあ、仕方がない。うん。俺作者が書いてるんだけどね。

渡

「・・・あなたを無視して進めたいのですか？」

「別にいいぞ。俺はお前にじゃなくてフィリアに用がある」

フィリア

「私……ですか？」

「そうだ。……まあ、渡の話が終わってからでいい。それまでトレーニングでもしてる。……トレーニングルーム借りるぞー」

そういつてスタスタと歩いていく青年。

レン

「さっきの人は？」

リュウセイ

「あったことあるような……ないような……？」

フィリア

「わかんないんかーい！私もだけど！」

セナ

「で、結局誰なんですか？」

渡

「……気にしないでください。剣崎さんのことは……今度こそ本題の「なあ渡ー」……なんですか？」

今度は天井に灰色のオーロラが現れ、その中からさっきとは違う青年が出てきた。……というより、飛び降りた？

渡

「何か用ですか？乾さん」

青年 乾巧は困ったような怒っているような表情をし、

巧

「剣崎がトレーニング中に消えた」

リュウセイ

「あ、さっき俺たちが使ってるトレーニングルームにいきましたよ？」

巧

「・・・本当か？」

フィリア

「はい。渡さんの話が終わるまでトレーニングしてるって」

巧

「あんの野郎・・・！」

今度は誰が見てもわかるような怒った顔をしていた。そして剣崎同様、スタスタとトレーニングルームに向かった。

渡

「はあ・・・やっと本題に・・・」「渡ー！」・・・殴ってあげましょうか、城戸さん・・・？」

城戸

「なぜ!？」

リュウセイ

「いろいろと・・・」

フィリア

「さっき二人も来たんで・・・」

城戸

「なるゝ。・・・でもキバット構えるのはやめようか渡くん!？」

いつの間にかキバットを構えている渡。・・・ていうか、握っているキバットがミシミシ言っている。

キバット

『わ、渡・・・いつからこんなに凶暴に・・・って力入れるあだだだだだ!?!』

レン

(渡さん、ストレス溜まってるんですねー)

セナ

(仕方ないよ。馬鹿神の世話してるようなもんだし・・・)

リュウセイ

(てか、もう時間なくなってきたよな?)

フィリア

(オリジナルの方たちのせいだね)

渡

「フィリア、思いっきり聞こえていますから」

フィリア

「……てへ」

リュウセイ

「てへ、じゃねえよ」

レン

「……渡さん、もう簡単にまとめて話してください……」

渡

「わかりました。……城戸さんはそこで待っていてくださいね……」

城戸

「りよ、りよーかい」

渡

「簡単にまとめると……最近近所の人たちが、家には大人がいなのか、子供だけなのか、捨てたのか……とかいろいろと変な噂みたいなのが広がっていて……」

フィリア

「そして、渡さんが保護者として家にいる……ということですか？」

渡

「そういう事。じゃあこれで終わりです。……城戸さん、行きますよ」

城戸

「え、どこに？」

渡

「剣崎さんと乾さんのところにです」 城戸さん引き摺りながら

城戸

「引つ張んな〜引き摺んな〜!」

フィリア

「・・・どんまい」

リュウセイ

「フィリア、剣崎さんのところに行くんじゃないのか?」

フィリア

「あ、そうだった。・・・なんだろうね、話って」

リュウセイ

「さあな。少なくとも・・・俺が関わっていいようなことじゃない・
・かもしれないな」

リュウセイは、笑いながら言う。

フィリア

「・・・関わってるじゃん、もう・・・」

フィリアは、リュウセイとは真逆に、泣きそうになりながら言う。

リュウセイ

「ええ!?なんで泣くの!?じよ、冗談に決まってるじゃん!?本
気にしないで!?嘘だから嘘!シヨークだから!ね!?!」

慌ててフィリアを慰めるリュウセイ。フィリアは・・・

フィリア

「・・・ふふ。わかってるよ、そんなこと。リュウセイがそんなこと言っはすないじゃん?」

リュウセイは「はめられた・・・orz」と言いながらがっくりとなる。

フィリア

「関わっていけないことはないと思うよ?」

そう言いながら、フィリアはトレーニングルームに向かっていった。

セナ

「・・・泣かせちゃったね、リュウセイ君」

リュウセイ

「んな!?!」

レン

「女を泣かせるな、リュウセイ」

リュウセイ

「う、うるせー!」

セナ

「いや、相変わらずラブラブだったよ?」

レン

「ああ。見てて飽きるほど」

リュウセイ

「お・・・お前らに言われたくない！」

そういつて自分の部屋に向かうリュウセイ。しかし、突然立ち止まり・・・

リュウセイ

「忘れてた。・・・お前ら今日からフィリアが使ってた部屋使ってくれ」

レン・セナ

「はあ!？」

リュウセイ

「フィリアは俺の部屋に来るから。・・・馬鹿神がこれから一緒に暮らせてさ。じゃ、先に行くな」

今度こそ自分の部屋に向かうリュウセイ。

レン

「んなこときいてねえぞ・・・」

セナ

「最悪・・・今度絶対ぶっ飛ばしてやるんだから!」

レン

「賛成だ」

何やら神の命が危ないが、まあ神なので大丈夫だろう。

セナ

「じゃあ、もうねよっか」

レン

「だな。・・・リュウセイのやつは、フィリアが戻ってくるまで起きてるだろうがな」

セナ

「あー、リュウセイ君ならそうだよ絶対。・・・あ、宿題しないと」

レン

「じゃあ一緒にやるか」

セナ

「うん！」

レンとセナは、宿題が簡単だとか、高校生だったんだから当たり前じゃん、とか会話しながら部屋に向かった。

第15話『説明会』（後書き）

作

「剣崎さんとたつくと城戸さんが出てきた、というところで、これから後書きにも出てきてもらいたいと思います！」

巧

「その前に……たつくん言うな！」

作

「うっさいたつくん」

巧

「ぶっ飛ばすぞ！」

作

「助かるもん！」

巧・作

「ぎゃーぎゃー！」

フィリア

「あーはいはい。やめやめ」

剣崎

「さて、次回はどうなることやら」

城戸

「てか……俺お前ら二人（剣崎、巧）のせいで渡に殺されかけた

「ただけど!?!」

剣崎・巧

「なんのことだ?」

城戸

「恍けんなあ……!」

城戸以外

「次回もお楽しみに!」

城戸

「まさかの無視!?!」

第16話『剣崎からの提案』（前書き）

作

「終わったー！じゃ、お休み」

巧

「いやいきなり寝んなよ!？」

作

「（　〇　）zzzz」

巧

「はや!？」

リュウセイ

「巧さん、シンジ兄さんと同じで突っ込みの役割になったね」

フィリア

「うん。・・・これで私たちもボケられるね」

巧

「いやボケるなあああ!？」

シンジ

「そしてツッコミはしたくてしてるわけじゃねえええ!？」

リュウ・フィリ

「ナイスツッコミ!」

巧

「はめるな!？」

シンジ

「いい加減にしるよ!？」

渡

「仲良くなれましたねー」 お茶飲みながら

城戸

「ホントにねー」 リュウフィリには元から懐かれてる

渡

「城戸さんはシンジさんとも仲良いんですね?」

城戸

「うん。オリジとリマジってことで」

剣崎

「・・・まあいい。世界を守りし者、第16話」

レン

「『剣崎からの提案』」

セナ

「始まるよー!」

第16話『剣崎からの提案』

フィリアは、トレーニングルームに到着し、今はものすごいものを見ていた。

フィリア

「・・・なにこれ」

フィリアの目の前では、ブレイドKFとファイズBFキングフォーム
フラスターフォームがガチンコバトルをしていた。

渡

「・・・あ、フィリア」

駆け寄ってくる渡・・・と、まだ引き摺られてる城戸。・・・城戸はそんなに悪くはないのだが・・・。

城戸

「いい加減俺を解放してくれ」

渡

「はいはい」

と言って手を放す渡。城戸は、グー！と背伸びをした。

城戸

「~~~~！ふう・・・。しっかし・・・なんで剣崎とたつくんはガチバトルしてるんだらうね」

渡

「なんでも、乾さんと模擬戦するときだけ、何らかの理由つけて休むらしいですよ」

フィリア

「要するに、戦いたくないんですかね？」

城戸

「俺には結構本気でやってくるんだけどなー・・・」

あははー・・・と笑いながら遠い目をする城戸。

トレーニングルーム・模擬戦場

まあここではブレイドKFとファイズBFが戦っているわけだが・・・

ファイズBF

「なんでお前は俺と戦うときだけやらねえんだよ!？」

ブレイドKF

「別にいいだろ・・・」

BFが蹴りを放ち、KFが軽く避ける。

ファイズBF

「よくねえよ!」

BFはパンチを繰り出すが、これもまた避けられる。

ブレイドKF

「いや、だつてなあ？お前俺だけに本気でやってくるだろうが！」

今度はKFがキングラウザーで切りかかるが、しゃがんで避けるBF。・・・これはもはや喧嘩だ。ただのライダー同士の喧嘩。

ファイズBF

「そういうお前も、俺には本気でやってきてるだろ！？」

BFは、『143 ENTER』と入力し、フォトンブレイカーモードにする。そして切りかかる。

ブレイドKF

「ふ・・・お前には全力は出していないな！出してるのは・・・城戸だ！」

キングラウザーで防ぎながら、反論するKF。・・・誰かこの二人を止めてくれ・・・。

トレーニングルーム・見学場

二人の戦いを見ている3人だが・・・

ブレイドKF

「・・・出してるのは・・・城戸だ！」

最初のほうは聞こえなかったが、最後ははっきり聞こえた。

城戸

「やっぱり本気出してた・・・orz」

・・・まあ、当たり前前落ち込むわけです。はい。

フィリア

「それより、止めないんですか？てか止めてください。いつまでたつても剣崎さんから話聞けません・・・」

困ったように言うフィリアに対して、渡も困ったように、

渡

「あれとめられるの、いましたっけ？」

と、城戸に聞く。

城戸

「それ俺に聞くこと!？」

城戸も知らないらしい。・・・となると、

フィリア

「・・・私止めてきまーす」

渡

「じゃあ僕も行きます。一人じゃ危ないと思いますよ・・・?」

フィリア

「・・・否定できないので困ります」

二人は模擬戦場に向かう。ちなみに城戸は・・・

城戸

「・・・俺どうしよっか？」

と悩んでいたとか。

無事に喧嘩を止めた二人は、剣崎から話をしてもらおう。・・・ちなみに、喧嘩止めて戻ってきたときには渡が剣崎と巧を引き摺ってたとかそうじゃないとか・・・。どういう止め方をしたのは、想像にお任せします。

フィリア

「それで、話ってなんですか？」

剣崎

「あ、ああ。実はな、この頃ショッカー達が少しずつ動いてるかもしれないんだ」

そう語る剣崎の頬に（巧の頬にも）殴られたような跡があるが気にしないでおこう。

フィリア

「ショッカーが・・・!？」

驚いたように声を上げるフィリア。渡たちも知ってるようで、頷きながらフィリアに話した。

渡

「そう。いきなり僕たちのところに来たりね」

巧

「まあぶちのめしてやったけどな」

城戸

「あー、俺も轢き逃げFVしたなあ……」

ファイナルベント

渡・巧・剣崎

「いや轢き逃げ言っな」

フィリア

「??？」

一人だけわかっていないが、見たことがないので仕方がないだろう。……シヨツカーが動き出しているかもしれない、と云うことと、そのことに関して剣崎は話があるようだ。

剣崎

「もしもカードデッキやデバイスが壊れたら、戦う手段がないだろ？」

フィリア

「……はい」

剣崎

「それで、お前の次元の本棚を使って、平成ライダーの各フォーム、各最強フォームなどをメモリやメダル作らないか？」

フィリア

「……え？」

啞然とするフィリア。渡たちも知らなかったのか、若干驚いている。

渡

「何かと思えば、頭おかしくなりましたか？城戸さんみたいに」

城戸

「俺って頭おかしいの!？」

巧

「バカってことだよアホ」

城戸

「俺の扱い酷くない!？」

城戸の扱いが酷いが、愛されてるバカってことで流しておこう。

剣崎

「あれ？話してなかったか？」

剣崎はきよとん、として渡たちに聞く。

渡・巧・城戸

「いや聞いてないし初耳だし」

渡たち三人は、そろって突っ込む。剣崎は頭を掻きながら謝罪していた。

剣崎

「あー、すまん。ドタバタしてたから話してなかったかもな……。まあ、今からフィリアに話すからお前らも聞いてくれ」

三人は頷き、剣崎はフィリアに向き直る。

剣崎

「で、話進めるぞー？おーい」

フィリア

「あ、はい。・・・でも、ライダーのメモリとメダルの作り方は？」

剣崎

「それを次元の本棚で調べてほしいんだ。ライダーの資料は俺が用意する」

渡

「って、いいんですか？それ」

剣崎の発言に突っ込む渡。剣崎は、

剣崎

「ん？大丈夫だろ。フィリアやリュウセイ達は神と渡が認めてるライダーだからな」

めっっちゃいい笑顔・・・そう、あれだ、本編でのあの笑顔。・・・で答える剣崎。今まで見たことのない笑顔に巧と城戸は若干驚き、渡は「まあ確かに・・・」と同意し、フィリアは照れる。

フィリア

「そんなに強くないですけどね・・・」

剣崎

「そうか？女ライダーにしては強いぞ？」

フィリア

「……ありがとうございます」

剣崎

「それで、作るのか？それによっては資料探さないといけないからな」

そっぴいなながら腕を組む剣崎。

フィリア

「作ります。……て言うか、探すんですか？」

剣崎

「ああ。探さないと見つからない」

フィリア

「なんでですか？」

剣崎はうーん……と首をひねり、考える。だが、溜息をつきながら渡が、

渡

「ありえないほど大量に資料があるんですよ。歴代のライダー、各フォーム、そして能力。……すべての資料があるので」

とフォローする。フィリアは納得したように、「あー……」と苦笑いしている。

剣崎

「まあとにかく、明日持つてくる。・・・ほかにも話があったが、それはまた明日にする」

フィリア

「あ、それじゃあ・・・」

とフィリアがここにきて、ある意味爆弾発言をする。

フィリア

「明日から学校何日か休んで作ります」

その言葉にオリジナル組はがくつとなる。剣崎なんかサングラスの位置が少しずれてるし、城戸なんか壁によっかかっていたから壁に頭をぶつけている。

まあ、言った本人が逆に驚いてるが・・・

フィリア

「え？だ、駄目ですか？」

剣崎

「バカ。せめて午前中は授業に参加しろ」

渡

「いやそれも駄目ですから剣崎さん」

すばーん！

・・・渡はどこから出したのか、ハリセンで剣崎の頭を思いっきり叩く。剣崎は悶えているが、渡は気にしない。

城戸

「さすがに学校には行ったほうが……」

フィリア

「だって勉強簡単すぎるんですもん……」

城戸・巧

「なら尚更ダメだろ!？」

フィリア

「えー……」

渡

「せめて学校に一日行って、そのあとは午前だけでいいですから。……でも、それなら他の三人もそうしないと怪しまれるから、他の三人もね」

フィリア

「はい……」

剣崎

「（渡つてあんなに乱暴だったか……？）詳しいこととかは、また明日話す。もう時間も時間だしな」

渡

「それより剣崎さん、誰が乱暴ですか？」

剣崎

「……じゃ」

渡に睨まれ、さつさとオーロラを潜っていく剣崎。

渡

「あ．．．逃げましたね、剣崎さん」

城戸

「じゃあ俺たちも戻るか．．．じゃあねー二人ともー」

巧

「じゃあなー」

手を振りながらオーロラを潜っていく城戸と、軽く手を振り、さつさとオーロラを潜っていく巧．．．渡は半ば呆れ、半ば喜んだように溜息をつく。

渡

「やっと戻ってくれましたね．．．さて、僕も資料探し手伝ってきますか．．．フィリアは早く戻ったほうがいいですよ？」

フィリア

「え？」

渡

「リュウセイ、多分フィリアのこと待ってると思うよ」

フィリア

「あ．．．そうですね。それじゃあ、お先に．．．おやすみなさい」

ペコ、っとお辞儀をして、急いで部屋に向かうフィリア。渡は少し微笑みながら．．．

渡

「おやすみ・・・」

と呟き、オーロラを潜っていった。

廊下を若干走りながら、フィリアは急いで部屋に向かっていた。向かっている途中に、

フィリア

（て言うか、メモリはわかるけど、メダルってなんだろう？）

と、疑問を持ったが・・・

フィリア

（まあいいか・・・。明日剣崎さんに聞けば）

ということ流した。

第16話『剣崎からの提案』（後書き）

作

「（　　）zzzz」

レン

「はい、作者は寝ているわけですが、」

セナ

「放っておきましょう」

シンジ

「うん鬼進行!？」

リュウセイ

「なんかなのは達原作キャラが空気だなー・・・」

フィリア

「ソウマとかツバサもね」

巧

「空気とかいうな」

城戸

「あ、でも次回にフェイトとツバサは出るって言うってたよ?」

リュウセイ

「とか言いつつ出ないかもしれない」

巧

「不吉なこといな！」

フィリア

「無計画作者・辰巳翔だからね」

レン

「だな」

セナ

「フォローしたくてもできないよねー」 棒読み

シンジ

「だから変なこと言わない！あとセナは絶対フォローする気ないよね！？」

剣崎

「 次回もよろしく」

シンジ・巧

「あんた（お前）もツッコミ手伝えやああああ！？」

第17話『ツバサとフェイト 前編』（前書き）

作「おっわったー！」

リュウセイ「夏休みもな」

作「それは言わないで…」

フィリア「ちなみに、私たちは今回出ません！」

セナ「出るのはツバサとフェイト、アルフ、アンデットです！」

レン「作者の記憶では、な」

作「何それ酷い」

ツバサ「それでは、第17話！」

フェイト「『ツバサとフェイト 前編』、」

ツバサ「『フェイト』が始まるよ！」

第17話『ツバサとフェイト 前編』

フィリアと剣崎達が話し合っていた日の朝、すっかり忘れていたツバサとフェイトは…

ツバサ

「忘れてたんかい!？」

フェイト

「いきなりどうしたの? ツバサ」

ツバサ

「あーいや、なんでもない。…それで、朝は何食つ?」

朝食の相談をしていた。…ちなみに、省略されているが、ツバサがフェイトの家で手当てをしてもらった後、迷惑をかけるという理由で礼を言っただけで家を出ようとしたところ…

回想…

ツバサ

「ありがとな。おかげで明日には直りそうだよ」

笑顔でお礼をいうツバサ。それを見てフェイトは、顔を赤くする。

フェイト

「あ、えっと…その…そんなに酷くなくてよかったです」

ツバサ

「だから大丈夫だって言ったじゃん。放っておけば直るから…まあ俺の、なんとというか…体質？がそう言うのだから何だけどね」

はは、と笑いながら答えるツバサ。だが心の中では…

ツバサ

(血…流…れて…なくて…よかった…。…あ…んな…の…見…られ…たく…ない…から…な…)

と思っていた。

フェイト

(そう言う体質…?)

ツバサ

「それじゃあ、また会えたら」

フェイト

「あ、待って。家ってどこ？」

フェイトがそう尋ねた瞬間、ツバサの表情が…固まった。

ツバサ

「……………え？」

フェイト

「いや、だから家ってどこ？」

ツバサ

「家か……そういえばなかったっけかなー」

はははー…と苦笑いするツバサ。

ツバサ

「まあ適当に野宿でもすればいいだろ」

と答えるツバサ。が、フェイトは…

フェイト

「ダメだよ！」

ツバサ

「え、なんで？」

フェイト

「命の恩人を野宿にはできないよ…」

ツバサ

「いや、命の恩人じゃないだろ。それに、俺は当然のことしただけだし…」

フェイト

「それでもだよ！…だからさ、…えっと…、家がないんなら、その…家にくる？」

少し俯き、恥ずかしそうに提案をするフェイト。しかしツバサは…

ツバサ

「いや、ダメだろ。迷惑かかるだろうし…それに俺といると、またアンデット…さっきの怪物に襲われるぞ？」

と、真顔で断った。

フェイト

「そ、そうかもしれないけど……。……だって、ツバサ助けてくれたし、迷惑なんてかからないよ。アルフだっていいと思うし……」

ツバサ

「んー……でも悪いだろ……」

フェイト

「悪くなんかないよ！……でも、いやならいいよ。他の人のところでお世話になってもいいし……」

ツバサ

「いやー、それも迷惑だろうし……俺なんかは野宿でいいよー」

フェイト

「……ごめんね、迷惑だったよね……」

そう言うフェイトの目からは、涙が……。突然泣き出したフェイトに、ツバサは慌てる。

ツバサ

「ちょ、なんで泣いちゃうの！？え、俺……何か悪いことした！？」

するとそこに……

アルフ

「どうしたんだい？フェイト……って、なんで泣いてるのさ！？」

様子を見に来たアルフも、泣いているフェイトをみて慌てて駆け寄る。そして、

アルフ

「ツバサ、フェイトになにかしたのかい!？」

ツバサを責める。

ツバサ

「ええ!？ち、違うよ!！」

アルフ

「じゃあなんで泣いてるのさ!！」

ツバサ

「フェイト達の家で世話になるのを断ったら泣き出して……」

アルフは、大体わかった気がした。

アルフ

「…ツバサ、人の好意は受け取るべきだよ、素直に」

ツバサ

「うっ……。で、でもな……?」

アルフ

「…ツバサ、あなたにはフェイトを守ってほしいんだ。…あなたしかいないんだ、あの人から守れるのは…。だからフェイトを守ってくれ!！」

アルフは真剣に、ツバサに訴える。…フェイトはそんなアルフに驚きつつ、ツバサの返事を待っていた。

ツバサは、アルフがいうあの人に疑問をもったが、ただ事ではないと思ったのか、

ツバサ

「……わかった。フェイトとアルフがいいんなら……」

頷いた。するとフェイトは笑顔になり、ツバサに飛びつく。

フェイト

「本当！？ありがとう、ツバサ！」

ツバサ

「ちょ、フェイト！？／／／」

突然飛びつかれ、驚くツバサ。フェイトは、慌ててツバサから離れる。…ちなみに、その様子を見ていたアルフは「この二人カップル？」と思っていたのは秘密だ。

回想終了……

フェイト

「んー……。ツバサに任せる」

ツバサ

「そうか。じゃあ……」

アルフ

「あたしは肉がいい！」

アルフは目をキラキラさせながら、二人に言う。だが二人は…

フェイト・ツバサ

「いや、朝からそれはないと思う」

二人でいきぴったりにツッコんだ。

ツバサ

「じゃあ今日は和食で、ご飯と味噌汁、焼き魚でいい？」

フェイト

「うん。いいよ」

アルフ

「あたしもいいよ！ツバサの料理はおいしいからね」

ツバサ

「…さつき肉がいい！って言ったのにか？」

アルフ

「あ、いや…」

ツバサ

「はは。すまんすまん。からかったただけだ。んじゃ作ってくるから少し待っていてくれ」

と言いながら、エプロン（手作りで青色）をつけるツバサ。するとフェイトが席を立ち、

フェイト

「あ、手伝うよツバサ。…私は何をすればいい？」

と言いながら、エプロン（ツバサと色違いで黄色）を付ける。ツバサは嬉しそうに答える。

ツバサ

「そうか？じゃあ味噌汁を作ってくれ」

フェイト

「うん。わかった」

キッチンに向かう二人の背を見送るながらアルフは、

アルフ

（…二人して鈍感なんだからなあ…）

と溜息をつく。

【…困ったものですね、マスターとフェイトさん】

と、テーブルの上に置いてあった剣のネックレスのようなものから、声が聞こえた。

アルフ

「まったくだよ…ね、エクス」

【そうですね】

声 ツバサのデバイスのエクスカリバー（通称エクス）が同じように呆れる。

エクス

【（マスター、あの姿になっていいですか？退屈です）】

ツバサ

「（ああ…あれか。まあフェイトやアルフにも言ってるし、別にいいぞ）」

エクス

【（ありがとうございます）】

念話で話すツバサとエクス。念話が終わると、テーブルの上にあいたあった剣のネックレスが光り…

エクス（人間態）

「あー…やっぱりこっちの方がいいです。退屈しなくていいのでぐーっと背伸びをするエクス。アルフは普通に話しかける。

アルフ

「あの二人、もう夫婦にしか見えないんだけど…」

エクス

「みんなそうだと思います。…読んでる方も」

エクス、メタい発言はやめてくれ。…それはさておき、キッチンでは……

ツバサ

「でも、来たときは驚いたなあ…。冷蔵庫にインスタントしか入ってなかったんだからな」

フェイト

「あー…あの時のツバサは怖かった。冷蔵庫見た瞬間、『何でこんなだけなんだ！栄養とれねえぞ！』って怒鳴られたもんね…」

その時のことを思い出し、フェイトは苦笑いをする。

ツバサ

「まだ小っちゃいのにあれはないだろ」

溜息をつきながら注意をするツバサ。

フェイト

「でもさ、ツバサが料理作ってくれた時はうれしかった。すごくおいしかった」

ツバサ

「そうかー？…まあ小っちゃいときから親なくしたからな…。一人暮らしで、自分で作って食ってたし」

笑顔で言っているが、その笑顔はどこか寂しそうに見えた…。

フェイト

「……ごめんね」

フェイトは悪いことを言っただと思い、謝る。だが、ツバサはそんなに気にしていなかったようだ。

ツバサ

「いや、気にしなくていい。…さて、できたから持っていくか」

フェイト

「うん」

ツバサ

「アルフー、エクスー。せめて運ぶのは手伝えー」

アルフ

「えー…「じゃあ飯抜き」…わかったよ」

エクス

「早いですね、もうできたんですか」

この後四人は話しながら朝食を食べた。

夜…とある森。そこにはフェイトと、ツバサ、そしてアルフがいた。
フェイト

「ふう…今日はなかったね、反応」

ツバサ（B）姿

「だな。……アンデットも出てないみたいだし…。今日は早く寝れ
そうだな」

フェイト

「そうだね」

アルフ

「さっ、早く帰ろう」

三人が歩いていると…

ガサ

ツバサ

「…？」

突然立ち止まるツバサ。フェイトとアルフも止まり、ツバサに聞く。

アルフ

「どうしたんだい？」

フェイト

「何か…いた？」

ツバサ

「いや…なんでもない。(まさか…な)」

また歩き始める三人。…しばらく歩き、またツバサが立ち止まる。

フェイト

「どうしたの？」

ツバサ

「…隠れてないで、さっさと出ていけ！」

右手をフェイトの前にだし、守るように立つ。すると茂みから何か

が飛び出してきた。

「うおおおお！」

敵は、爪をたて、ツバサ達に襲いかかってきた。

ツバサ

「っ！？避ける！」

フェイトを突き飛ばすように思いっきり押す。フェイトはギリギリ避けたが、ツバサは完全に避けられず、敵の爪が頬を掠った。そしてそこから血が流れてくる…

ツバサ

「！？（やべ…！）」

慌てて袖で血をふき取るツバサ。

フェイト

「ツバサ！大丈夫！？」

ツバサ

「ああ…。少し油断しただけだ」

「覚悟しろ…！」

ツバサ

「それはこっちのセリフだ！エクス、一旦解除するぞ。ブレイドで行く！」

BJを解除すると、ベルトを取りだし、それを腰に巻く。エクスは人間態になり、さらに自分用のデバイスでセットアップをする。

ツバサ

「変身！」

<ターンアップ>

ブレイド

「行くぞ！…エクス、援護を頼む！」

エクス

「了解」

アンデットとブレイド、エクスの戦いが始まった。

第17話『ツバサとフェイト 前編』（後書き）

作「じゃ、続き書いてくる！」

ツバサ「書き終わってるんじゃない？」

作「…次の次か。まあいいや。書いてくる！」　ダッシュで去って行った

フェイト「がんばる」

アルフ「しっかし…」

ツバサ「どうした？」

アルフ「あそこですごくまってる子はどうしたんだい？」

なのは「いいよねー、フェイトちゃんは私より出番があつて…どうせ私なんかさ…」

シンジ「なのはちやああああん!？」

城戸「カムバアアアアック！」

リュウセイ「…次回、世界を守りし者は！」

フィリア「またまたツバサとフェイトの話だよ！」

レン「第18話『ツバサとフェイト 後編』」

セナ「お楽しみに！」

全「…己の剣で未来を切り開け！」

第18話 『ツバサとフェイト 後編』 (前書き)

作「えー、本当にすいませんでした！この頃時間がなく執筆できませんでした…。本当に申し訳ございません！」

リュウセイ「…許してやってください」

なのは「大変そうだったよね、書くの」

フィリア「うん。…こんな時間だからね」

現在

23時29分…非常に眠いです。

レン「それではー、第18話、」

セナ「『ツバサとフェイト 後編』」

レンセナ「『始まります！』」

第18話『ツバサとフェイト 後編』

ブレイド

「アルフ、フェイトを連れて安全なところで待ってる。すぐ終わらせて向かう！はああああ！」

アルフの返事を聞く前に、ブレイラウザーで切りかかるブレイド。その後ろからエクスが魔法弾を敵に向かって放つ。

フェイト

「でもツバサ…！」

ブレイド

「いいから！…頼む、安全なところで待っていてくれ！」

ブレイドは敵の攻撃をブレイラウザーで受け止めながら答える。

フェイト

「…わかった。待ってる！」

アルフ

「フェイト、乗って！急ぐよ」

フェイト

「…うん」

フェイトはアルフに乗り、安全なところまで向かった。

ブレイド

「よし…。…お前を封印させてもらっぞ！カードが少なくて困ってたんだ！」

ブレイドはアンデット ライオンアンデットにきりかかる。…しかし、簡単に避けられてしまう。

ブレイド

(くっそ…カードはサンダーとキック、…マツハにマグネットだけ…。…サンダー、キック、マツハは最後に取っておくとして…マグネットだけか…)

エクス

「マスター！前！」

ブレイド

「え？」

ブレイドはエクスに言われ慌てて前を見る。すると…

ライオンアンデット

「おおおおお！」

殴り掛かってくるRアンデットの姿が…

ブレイド

「うわっと…っと…！」

慌てて避けるブレイド。しかし、慌てて避けたために、バランスを崩してしまう。ライオンアンデットは、それを狙っていたかのように、また更に殴り掛かってくる。

ブレイド

「っ！」

だが、ライオンアンデットの攻撃は当たらなかった。…それどころか、今度はライオンアンデットがバランスを崩し、倒れる。なぜなら…

エクス

「まったく…忘れてもらっただらこまります…」

ブレイド

「エクス…助かった…」

エクスが背後からきりかかったからだ。

エクス

「さっさと終わらせてフェイトさんとアルフさんと帰りましょう」

そう言っつて剣を構えるエクス。

ブレイド

「そうだな」

エクス

「僕が隙を作ります。その隙に決めてください」

ブレイド

「おっけー。…頼むぞ、エクス」

エクス
「了解！」

そう言つて走り出すエクス。起き上がったライオンアンデットはエクスの攻撃を簡単に受け止める。エクスはすぐさま距離を取り、魔法を放つ。

ライオンアンデット
「ぐ……」

エクス
「…僕は剣だけ使うんじゃないよ？」

ライオンアンデット
「ちっ…厄介なやつだな…」

エクス
「(マスター、準備おっけーですか?)」

ブレイド
「(おう!いつでも!)」

ライオンアンデット
「来ないならこっちから行くぞ！」

素早く距離を詰め、エクスに爪で切りかかる。

ライオンアンデット
「覚悟しろ！」

しかし、エクスは簡単に攻撃を止める。

エクス

「上手くひっかかりましたね…。相手は僕だけじゃないはずですよ？」

<キック サンダー マツハ>

ライオンアンデットは、急いでその場からよけようとするが、エクスがそれを許さない。

エクス

「…覚悟するのは、あなたの方みたいですよ？…マスター！」

<ライトニングソニック>

ブレイド

「うおおおおおおお！」

エクスはギリギリまで押さえ、ライトニングソニックを避ける。ライオンアンデットは避けられるはずもなく…

ライオンアンデット

「がああああ！」

ライオンアンデットはあ吹き飛ばされ、倒れる。そして、バックルが開く。

ブレイド

「よし…。封印っつと…」

ブレイドはカードを投げる。ライオンアンデットは、カードの中に吸い込まれるようにして消えた。

ブレイド

「おわったあああ！」

変身を解きその場に大の字になるツバサ。

エクス

「マスター……。はやくフェイトさんとアルフさんのところに行きま
すよ」

ツバサ

「その前に、やっぱり敬語はやめてくれ……」

エクス

「？なぜ？」

ツバサ

「いや……。なんか堅苦しいって言うか……」

エクス

「まあマスターが言うのでしたら……」

と、そこに……

フェイト

「ツバサ……！」

アルフ

「大丈夫だったかい!？」

フェイトとアルフが走ってやってきた。

ツバサ

「おー、フェイトにアルフじゃねーかー。どうしたそんなに急いで…ってうお!？」

突然フェイトがツバサに飛びつく。

フェイト

「本当に心配したんだよ！安全なところに行ったら爆発音とかいっぱい聞こえるし…」

アルフ

「フェイトかなり心配してたんだよ」

ツバサ

「そっか…。ごめんな…」

優しくフェイトの頭をなでながら謝るツバサ。

ツバサ

「…でも大丈夫！俺元気だから！」

フェイト

「…ケガとかは？」

ツバサ

「全然！」

エクス

「バリバリ元気ですよ。呆れるほど」

ツバサ

「なんだよそれー！」

エクス

「そのまんまの意味です。…さて、早く帰りましょう」

ツバサ

「そうだな」

フェイト

「そうしよっか。…眠い…ふぁ…」

あくびをするフェイト。それを見たツバサは、

ツバサ

「寝てもいいぞー」

…と、軽くフェイトに言う。

フェイト

「え？で、でもツバサも疲れてるでしょ？」

ツバサ

「大丈夫。…フェイトのほぅが疲れてるだろ。魔法使ったりしてるんだし…」

フェイト

「でも…」

アルフ

「…フェイトお、ツバサの言葉に甘えなって」

エクス

「そうですね。マスターはバカみたいに元気ですから」

ツバサ

「遠まわしにおれがバカってことですかそうですね」

フェイト

「じゃあ…お言葉に甘えて…」

ツバサ

「どーぞ！」

アルフ

「…さて、今度こそ帰ろ！」

エクス

「早くしないと寝る時間なくなりますからね」

ツバサ

「あ、そうだった。急がないとな。…っよ」

ツバサはフェイトを抱えて（お姫様抱っこ）立ち上がる。

ツバサ

「エクスー。B Jバリアジャケットよろー」

エクス

「了解です」

ツバサ

「セットアップ」

アルフはオオカミの姿になる。

ツバサ

「俺道覚えてねえや」

アルフ

「……。…アタシが先に行った方がいいのかい？」

ツバサ

「そうしてください。俺前だと絶対道に迷いますから」

アルフ

「あはは…。じゃあ行くよ！見失わないように気を付けるんだよ！」

ツバサ

「おっけー」

アルフ

「あー、やっと帰ってきた」

ツバサ

「アルフー。ちょっと部屋の扉開けてくれー」

アルフ

「あ、はいはいー」

アルフは小走りにツバサの下へ行く。

アルフ

「ほい」

ツバサ

「サンキュー……。……よっと」

ツバサはベッドにそっとフェイトを寝かせる。……よほど疲れていたので、帰りにフェイトは起きなかった。……ツバサ的には起きてもらわなくてよかったかもしれないが……（お姫様抱っこしてたか）。ツバサも寝ようと部屋に行こうとしたが、フェイトが服の袖を握る。

ツバサ

「ん？……えっと、アルフ。俺はどうすればいい？」

アルフ

「……さあ」

ツバサ

「まあいいや。俺しばらくフェイトのそばにいる」

アルフ

「分かった。エクスにも伝えておくよ。…ていうか、あんたもうそこで寝たら？」

ツバサ

「…まあそのまま寝るってことはありえるかもなあ…。ま、そんな時はそんな時だ。おやすみ」

アルフ

「おやすみ」

アルフはフェイトの部屋を出て、エクスの部屋に向かう。…なぜフェイトの部屋で寝ないのだった？それはアルフが空気を読んだためである。

次の日、結局ツバサはそのままフェイトのベッドの近くで寝てたとか…（笑）

第18話『ツバサとフェイト 後編』（後書き）

作「ごめんなさいブレイドとかアンデットとかウィキクオリティです。うる覚えクオリティです…orz」
なのは「げ、元気出して！作者さん！」

ツバサ「…作者がもう寝そうなんだけど…」

リュウセイ「いや、もう寝てる」

作「くかー…」

フィリア「相変わらず早い…」

リュウセイ「次回は俺達サイド！」

フィリア「楽しみにしていてください！」

全「戦わないと、守れないものもあるー！」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2785m/>

魔法少女リリカルなのは～世界を守りし者達

2011年10月28日00時07分発行